

福岡市

公園関係埋蔵文化財調査報告書

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集

219

1990

福岡市教育委員会

公園関係埋蔵文化財調査報告書 1 正誤表

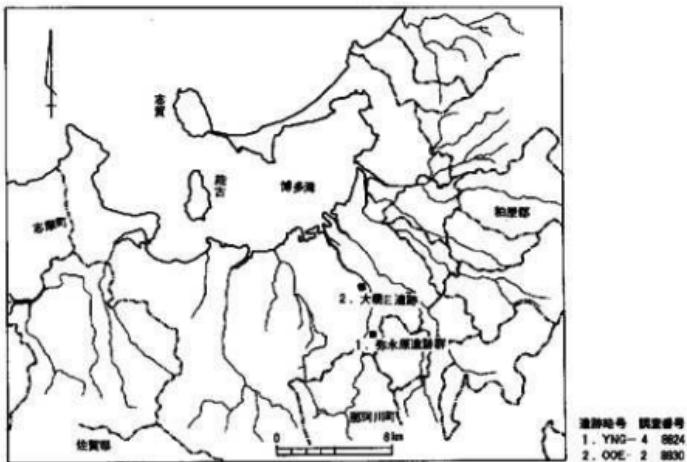
P	行	誤	正
表紙		埋蔵文化財調査報告書第220集	埋蔵文化財調査報告書第219集
9	3	1987(昭和62)年	1986(昭和61)年
9	6	12月1日～12月10までの10日	10月1日～10月2日までの2日
9	7	更に翌年1988年には	更に1988年には
表		8770--871201-871210-	8641--861001-861002
38	補図	Fig.37 土—包含層出土遺物実測図 (1/2-1/3)	Fig.35 S X07土 出土状況実測図 (1/30)

福岡市

公園関係埋蔵文化財調査報告書

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集



1990

福岡市教育委員会

序

本報告書は、本市の重要施策の一つとして進められている都市公園整備事業に伴って発掘調査が実施された南区柳瀬東公園および同区大橋南公園建設地についての調査報告書であります。

今回調査の成果は本報告書にみられますように多大なものがあり、今後同事業についての報告書は継続して刊行の予定であります。

就きましては本書に収録されました成果が広く市民に活用され、文化財保護思想の育成に資するとともに学術的分野においても役立つことを願ってやみません。

また発掘調査にあたりましては従事された作業員の方々に非常な御協力を得たことに感謝の意を表する次第であります。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

一例　　言一

本報告書は、福岡市都市整備局公園緑地部公園計画課の市域内都市公園建設に伴い、これに先立って発掘調査を実施した柳瀬東公園（南区、1988年7月4日～7月16日）および大橋南公園（南区、1987年12月1日～12月10日、1988年7月23日～8月20日）についての発掘調査報告書である。

- 発掘調査は、大橋南公園調査第1次（大橋E遺跡第1次）を本課小林義彦、同第2次（大橋E遺跡第2次）および柳瀬東公園（弥永原遺跡群第4次）を横山邦雄が行なった。
- 遺構の実測は、各担当者の他に本課吉留秀敏および高橋健二（別府大学）の応援を得た。
- 遺物の実測は、各担当者の他に本課宮井善朗、埋蔵文化財センター後藤直、九州大学考古学研究室久保寿一郎、田崎真理の諸氏に協力をいただいた。
- 遺構および遺物撮影は、小林、横山で行なった。
- 本書の執筆は、大橋南公園第1次調査を小林、他を横山が分担した。また編集は、小林の協力を得て横山が行なった。

柳瀬東公園（弥永原遺跡群第4次）

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の立地と環境	1
第3章	調査の記録	3
第4章	おわりに	6

図版目次

PL. 1	1. 柳瀬東公園調査前（南から） 2. 造構出土状況全景（北東から）
PL. 2	1. S C02住居址出土状況（北から） 2. 造構出土遺物

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図（1/25,000）	2
Fig. 2	柳瀬東公園調査地点位置図（1/4,000）	3
Fig. 3	調査地点位置図（1/400）	4
Fig. 4	調査区造構全体図（1/100）（折込み）	
Fig. 5	S C01住居址出土状況実測図（1/60）	5
Fig. 6	S C02住居址出土状況実測図（1/60）	5
Fig. 7	S ×01竪穴出土状況実測図（1/30）	6
Fig. 8	出土遺物実測図（1/4）	5

大橋南公園（大橋E遺跡第1・2次調査）

本文目次

第1章	はじめに	9
第2章	遺跡の立地と環境	10
第3章	調査の記録	15
I.	第1次調査	15
1.	調査概要	15
2.	調査の記録	15
1)	土壤	15
2)	包含層出土の遺物	24
3.	小結	26
II.	第2次調査	27
1.	調査概要	27
2.	調査の記録	28
1)	土壤	28
2)	溝状造構	38
3)	包含層・表採の遺物	42
第4章	おわりに	43

図版目次

PL. 3	1. 大橋E遺跡第1次調査第I区全景 2. 大橋E遺跡第1次調査第II区全景
PL. 4	1. SK01土壤出土状況

2. 包含層出土鉄型
- PL. 5 1. 大橋E遺跡第2次調査区（調査前、西から）
2. 大橋E遺跡第2次調査東半部全景（西から）
- PL. 6 1. SX02土壌出土状況（西から）
2. SX01土壌出土状況（南から）
- PL. 7 1. SX01土壤内遺物出土状況（西から）
2. 大橋E遺跡第2次調査西半部全景（東から）
- PL. 8 1. SX06・08・10土壤出土状況（東から）
2. 調査区西半部作業風景（東から）
- PL. 9 遺構出土遺物（1）
- PL. 10 遺構出土遺物（2）

擇図目次

Fig. 9	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	12
Fig. 10	大橋南公園調査地点図 (1/4,000)	13
Fig. 11	第1次調査区遺構配置図 (1/100)	16
Fig. 12	SK-01実測図 (1/30)	17
Fig. 13	SK-01上層出土遺物実測図 (1/4)	18
Fig. 14	SK-01下層出土遺物実測図 (1)(1/4)	19
Fig. 15	SK-01下層出土遺物実測図 (2)(1/4)	20
Fig. 16	SK-02、04、05、08、09実測図 (1/30)	21
Fig. 17	SK-06、07実測図 (1/30)	22
Fig. 18	SK-02~04、06、07出土遺物実測図 (1/4)	23
Fig. 19	SK-01、03出土石器実測図 (1/3)	24
Fig. 20	包含層出土遺物実測図 (1/4)	24
Fig. 21	包含層出土石器実測図 (1/3)	25
Fig. 22	包含層出土玉実測図 (2/3)	25
Fig. 23	包含層出土鉄型実測図 (1/1)	26
Fig. 24	第2次調査区位置図 (1/600)	27
Fig. 25	調査区遺構全体図 (1/100)(折込み)	
Fig. 26	SX01土壤出土状況実測図 (1/30)	29
Fig. 27	SX01土壤出土遺物実測図 (1)(1/4)	30
Fig. 28	調査区土壤断面実測図 (1/60)(折込み)	
Fig. 29	SX01土壤出土遺物実測図 (2)(1/4)	32
Fig. 30	SX01土壤出土遺物実測図 (3)(1/4)	33
Fig. 31	調査区出土遺物実測図 (1/2)	35
Fig. 32	SX03土壤出土状況実測図 (1/30)	36
Fig. 33	SX04土壤出土状況実測図 (1/30)	36
Fig. 34	SX05土壤出土状況実測図 (1/30)	37
Fig. 35	SX07土壤出土状況実測図 (1/30)	38
Fig. 36	SX10土壤出土状況実測図 (1/30)	39
Fig. 37	土壤・包含層出土遺物実測図 (1)(1/2・1/3)	40
Fig. 38	土壤・包含層出土遺物実測図 (2)(1/2・1/3)	41

柳瀬東公園(弥永原遺跡群第4次)の調査

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

1987(昭和62年)年福岡市都市整備局公園緑地部公園計画課より、南区柳瀬二丁目に「柳瀬東公園」建設の事業計画が埋蔵文化財課に出された。埋蔵文化財課では当該地における埋蔵文化財有無の確認のため同年10月1日に試掘調査を行なった結果、文化財が認められた。これにより建設によって失なわれる部分の本格的調査が必要となり、公園計画課と協議を重ねた結果1988(昭和63)年7月4日より調査を開始した。

2 調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園緑地部公園計画課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

事務担当 柳田純季(課長)、折尾 学(第1係長)、松延好文(事務)

調査担当 横山邦雄

整理作業 小森佐和子、土斐崎つや子、倉吉立子

発掘作業 山部増人、廣瀬 梓、大近麻子、松浦ウメノ、西田幸子、藤友洋子、山本后代(敬称略)

なお発掘調査にあたっては、地元柳瀬一丁目三区内会長手嶋 實氏、柳瀬公民館館長白水氏に諸々の便宜をはかって戴いた。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

弥永原遺跡群は、那珂川右岸に位置し、南方の觀音山(標高132m)より北にのびる標高40~20mの丘陵西辺(標高24m)に立地する。浅い谷をへだてた東方の福岡女学院付近弥生時代後期の土壙墓・箱式石棺墓・椭円形石室からなり、「長宣子孫」内行花文鏡などを出土した日佐原遺跡、更に北方800m程には弥生時代中期の奴国王墓と考えられる須玖岡本遺跡をはじめとする弥生時代の墳墓群、集落、工房址などが多く点在し、特に弥生時代墓制の地域的変遷を辿る上で弥永原遺跡群および日佐原遺跡との関係は重要である。

ここでこれまでの弥生原遺跡群の調査(第1次~3次調査)について概略を述べる。

第1次調査、昭和34(1959)年1月にはガラス製勾玉鋲型が出土した。

第2次調査昭和40(1965)年調査。九州大学考古学研究室を主力とする福岡県教育委員会の調査が行なわれた。

第3次調査、福岡市住宅供給公社による弥永団地造成のため昭和41(1966)年12月8日から



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 弥永原遺跡群(今回調査)
2. 弥永原遺跡群
3. 弥永原遺跡群
4. 日佐遺跡群
5. 上日佐遺跡
6. 豊路郷A遺跡
7. 弥永遺跡群
8. 豊勢郷B遺跡
9. 老司池A遺跡
10. 老司池B遺跡
11. 老松神社古墳群
12. 老司瓦窯址
13. 老河B遺跡
14. 老河A遺跡
15. 卮内尺古墳群
16. 野多H.C遺跡群
17. 野多目A遺跡群
18. 野多目B遺跡群

昭和42（1967）年1月18日までの断続的調査が行なわれた。調査区は南側（A地区）と北側（B地区）とにわかれ、ともに削平を受けている。A地区では弥生中期の東西に走るV字溝、B地区では南北に走る延長80m程の断面逆台形の溝（弥生時代後期）および6軒の竪穴住居址が検出された。円形および方形・長方形があり、弥生中期・後期に亘る。

第4次調査区はB地区の北側に位置しており、弥生時代中～後期集落址に含まれ、北側に谷を狭んで時期的に対応する墳墓地である日佐原遺跡がある。

第3章 調査の記録

概要 対象地は旧墓地であった。試掘調査により北側および北東側は擾乱のため造構はなく、本調査においても西側の墓掘方による擾乱が著しかった。調査では、長方形竪穴住居址2軒、長方形竪穴1基、溝1条および調査区南半部で径20～60cm程の柱穴群を検出したが建物としてはまとまらなかった。造構埋土は暗褐色の固くしまった粘質土である。（Fig.3）

1. SC01住居址（Fig.5） 調査区のほぼ中央部に検出された。住居址は長方形と考えられ、東壁長3mを残し、北側にコーナーを有する。壁はほぼ立あがりで15cm程で、壁に沿う幅20cm

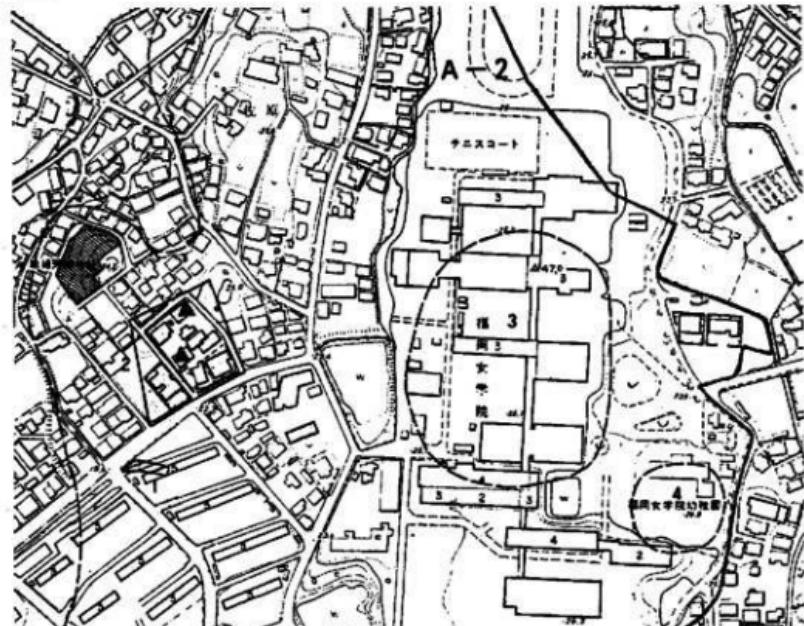


Fig. 2 柳瀬東公園調査地点位置図 (1/4,000)

の溝がめぐる。壁下北側寄りには長・幅が $1 \times 0.7\text{ m}$ 、深さ20cm程の長方形土壌がともなう。また壁溝内端より幅90cm程の部分に径26~28cmの主柱穴3本が認められ、西側の1本を欠く。柱間は南北で2.6m、東西で1.9mを測る。柱穴と壁延長から南北方向(東) 残長は復元長で



Fig. 3 調査地点位置図 (1/400)

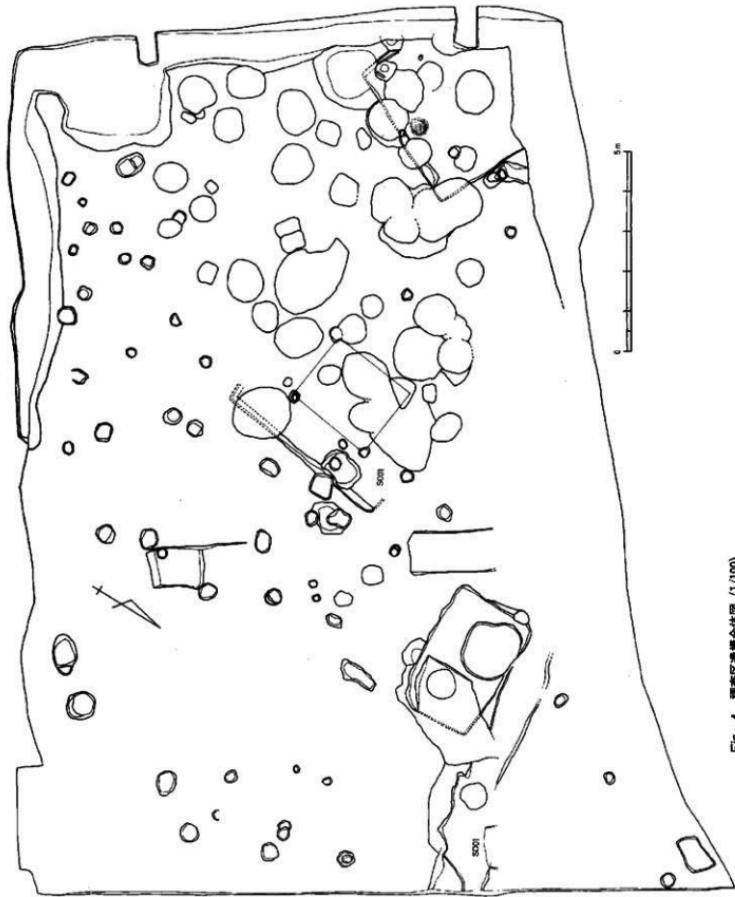


Fig. 4 丽江反瓣螺全个体图 (1/100)

4.7m程となる。埋土からは時期を示す明確な遺物は少なかったが、不安定な平底を有する甕底部(Fig. 8-00001)がある。器色は外面暗赤褐色、内面淡黄褐色を呈し、胎土は密である。焼成は堅緻で、調整は外面ナデで内面は顕著なヘラ削りを施す。

2. SC02住居址 (Fig. 6, PL. 2-(1))

調査区西側隅で検出した。現存状況では、北側壁を全く失い、他の3つの壁面を断片的に残すのみである。近現代墓の掘方による擾乱が著しい。壁は東側で高さ10cm程を有し、幅10~30cmの壁溝が断続的に残る。溝は10cm程の深さである。平面形のコーナー部分を失うが、壁の連絡から東壁長は3.8m前後となる。また北壁側に主柱穴が1個みられ、径30cm、深さ40cmをはかる。東壁に中央付近に径40cm程の炉址が残り、深さ5cm程の浅いピットに焼土がつまる。

3. SX01竪穴 (Fig. 7) 調査区北側隅に検出した。ほぼ東西方向に主軸を向ける長方形土壙である。壁はI字状を失うが、垂直に立あがり、床面もほぼ水平である。深さは南側で70cm、西側で50cm程をはかる。形状から墳墓とも考えられるが、墓掘方による擾乱で明らかにならない。

4. SD01溝 (Fig. 4) 調査区東側で検出した。東西に走る幅1m、

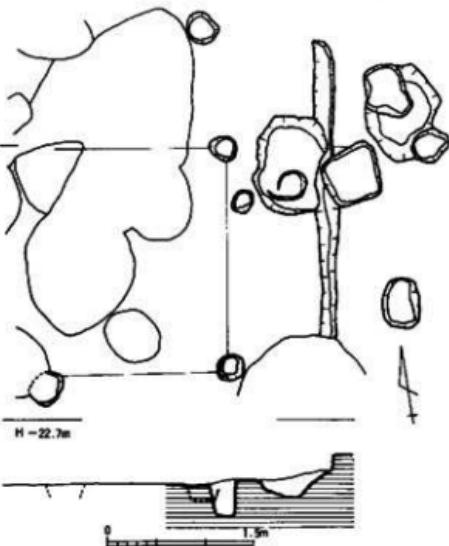


Fig. 5 SC 01住居址出土状況実測図 (1/60)

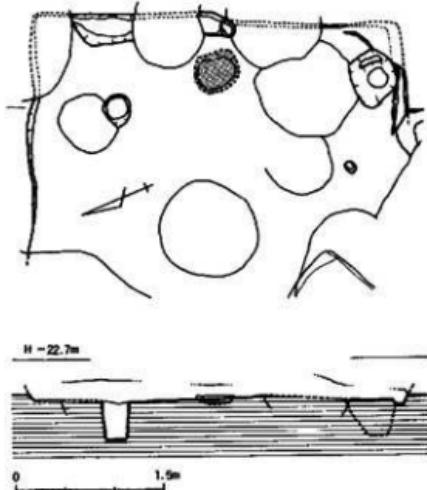


Fig. 6 SC 02住居址出土状況実測図 (1/60)

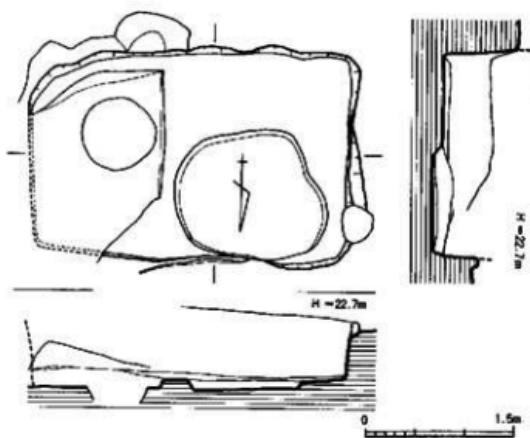


Fig. 7 SX01 坪穴出土状況実測図 (1/30)

延長6mの溝で深さは20cm程度の溝である。SX01坪穴に切られている可能性がある。若干の遺物が出土した。斐底部00005(Fig. 8)は、器壁が薄く、器色外面暗黄褐色～赤褐色、内面黄褐色を呈する。調整は外側にタテハケ目、内面ナデである。胎土砂質、焼成軟質で、底径8.4cmを有する。

5. ピット群(Fig. 4) 南半部にまとまって検出したが、時期不詳の弥生、土師器片の他に須恵器片も埋土に含み、弥生後期～古墳時代後期の時

代にまたがると考えられる。

第4章 おわりに

第4次調査で検出した坪穴住居址、坪穴、溝・ピット群は、各れも遺構の残りが悪く出土遺物も少量のため十分に時期を明らかにし得ないが、SD01溝は弥生時代後期の可能性が高い。またSC02住居址出土斐から住居址は古墳時代に属し、調査区内の擾乱坑や表土層からの出土ではあるがFig. 8にみる須恵器(00009・00012～00016)の出土があつて古墳時代後期に位置づけられようか。

(註)

註1)「福岡市糸田町竹ヶ木本遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告第22號

註2)「福岡縣糸田水原遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告第29號

註3)「福岡市糸田水原遺跡調査報告」福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会、1967年4月

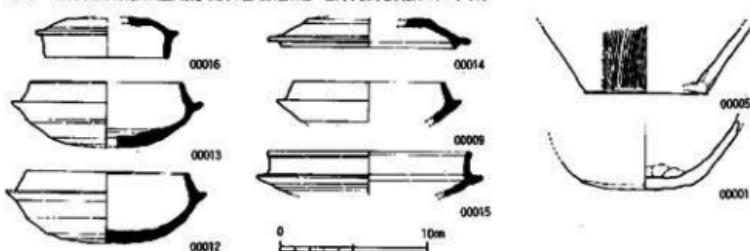


Fig. 8 出土遺物実測図 (1/4)

大橋南公園(大橋E遺跡第1・2次)の調査

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

1987(昭和62)年、福岡市都市整備局公園建設課による大橋南公園(南区大橋四丁目647-5・6)建設計画が出され、当該地について埋蔵文化財の有無の確認がなされた。この結果弥生時代中期を主とする生活遺構が確認され、建設についての工事時期も迫っていたために同年12月1日～12月10日までの10日間発掘調査を実施した。(大橋E遺跡第1次)

更に翌年1988年度には第1次調査区の南側隣接地に公園拡張の計画が出され、1988(昭和63)年2月24日に当該地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無の確認にあたった。試掘調査では弥生時代中期の整穴住居址と考えられる遺構が検出された。このため同年7月より約1ヶ月の発掘調査を実施した。(大橋E遺跡第2次)

次数	調査番号	原 因	調査地 住 所	調査面積	調査期間	担当者
1	8770	公園建設	南区大橋四丁目647-5・6	100m ²	871201～871210	小林義彦
2	8830	公園建設	南区大橋四丁目647-5・6	567m ²	880723～880820	横山邦維

2. 調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園計画課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

事務担当 松延好文

調査担当 柳田純二(課長)、折尾 学(第1係長)、小林義彦・横山邦維(発掘調査)

調査補助 高橋健治(別府大学)

整理作業 小森佐和子、土斐崎つや子(第2次調査)

発掘作業 大近麻子、大和秀祐、中垣安隆、西山秀子、嶋ヒサ子、廣瀬 梓、松尾利浩、松浦ウメノ、山部増人、山本后代(敬称略、以上第2次調査)

なお発掘調査にあたっては公園計画課および調査地周辺の住民の方々に諸々の御協力を得た。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

大橋E遺跡は、福岡平野の南西部を占める油山山塊の東麓に位置し、標高10mをはかる。遺跡周辺は市街地で旧地形を知り得ない程住宅地が疎らこみ、從来遺跡としての存在が不明であった地域である(Fig. 1-1)。

遺跡は筑紫郡那珂川町に発し、福岡平野を貫流する那珂川の中流域左岸の西側500m程にあたり、これの支流である小河川老司川が遺跡のすぐ東側を流れている。

これらの河川による過去の地形形成は著しいものがあったと考えられ、遺跡地の弥生時代を中心とする生活面地山は灰色粗砂～黃白色シルトであり、遺構埋土も砂質の強いものが殆どである。

遺跡周辺ではこれまでに発掘調査の行なわれた遺跡の数は多くないが、那珂川左岸流域を中心としてこれまで調査された遺跡を簡単に紹介して大橋E遺跡理解の一助としたい。

野間B遺跡(Fig. 1-2) 南区向野2丁目に所在し、これまでに3回の発掘調査が行なわれた。1987年5月(第1次)、同年10月(第2次)、1988年5月(第3次)が夫々である。第1・2次調査では、円墳2基(6C初頭・7C初)および円形住居址1軒(中期前半)が検出された。第3次調査では、円形住居址2軒、方形住居址1軒、掘立柱建物1棟、土壙3基、溝1条^(注1)などが検出された。このうち生活遺構はほぼ弥生時代中期前半代のもので、同時期の土器類とともに石庵丁・石鑿・扁平片刃石斧、石劍末成品、磨石、打製石器などが出土した。標高30mの丘陵上で磨製収穫用石器が共通に見出され、中期前半代の集落址として一単位と考えられる。

(注1)「福岡市南区野間B遺跡第一・二次調査」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第21号」1989.3. 福岡市教育委員会

(注2)「福岡市南区野間B遺跡第一・二・三次調査」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第23号」1990.3. 福岡市教育委員会

三宅庵寺(三宅B遺跡群、Fig. 1-14) 南区大字三宅字コケフ1170-2番地に所在する。1977(昭和52)年11月～1978(昭和53)年3月まで住宅建設に伴って発掘調査が行なわれた。調査地点は、標高11mを測る低丘陵上で、周辺には三宅瓦窯址・岩野瓦窯址などが知られる。

調査は約1800m²の規模で行なわれ、主要な遺構で調査区西南部に瓦窯、同南西部中央で布掘りの縦柱建物(2×2間、第1号建物)1棟、および同東南中央部に3×4間の南北建物1棟がある。またこの他には建物の周囲を東西・南北に区画した溝22条や土壙4基、多くのピット群が検出された。

瓦窯は建物雨落溝内にあり、老司I式の瓦類を主体とするものである。また第1号建物は東西2間(3.9m)、南北2間(5.1m)の規模であるが、柱根の残りは良好で径が平均で40cmをはかる。第2号建物は東西3間(8.5m)、南北4間(10.05m)の側柱建物であり、柱根径20cmである。

次に出土遺物は、瓦類、壺、須恵器、土師器、輸入陶磁器（越州窯、龍泉・珠光青磁）、木器（櫛など）、木筒、ガラス製品（皿か）、金属器（黄銅匙・箸、富壽神寶など）、石器（石帶巡方など）などがあり、多種多量にわたっている。

三宅廃寺は遺構が時期的に2時期あるとされ、Ⅰ期—飛鳥後半—奈良前期にあたる瓦溜遺構の時期、Ⅱ期—奈良後期で掘立柱建物、溝がこれにあたる。また遺物の上では平安期（9世紀前半）のものを含む点で7世紀後半から9世紀前半までつづいた寺院址と考えられており、規模も東西に100~110m程度としている。
(註) 「福岡市南区三宅廃寺発掘調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第56号」 1999、福岡市教育委員会

野多目古墳遺跡 (Fig. 1-20、野多目C遺跡群) 南区大字野多目字古墳に所在し、これまで3次の調査が行なわれた。

遺跡は、那珂川の左岸にあり、標高15~16mの河岸段丘上に立地する。

第1次調査 1980(昭和55)年11月、1981(昭和56)年8~11月の2回にわたる調査で、縄文時代中期末~後期初頭にかけての貯蔵穴50基、溝1条および河川跡・弥生時代前期後半~中期初頭の住居址・礪穴・古墳時代住居址64基・古代の7群に区分される掘立柱建物24棟以上で7~9世紀代のものなどが検出された。併しながら調査は盛土による保存がはかられたため、完掘しなかったので時期的に十分な確定資料を得ていない。
(註) 「野多目古墳遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第83号」 1983、福岡市教育委員会

第2次調査 第1次調査の北側に接する下水道に伴う調査で、1984年10~11月に行なった。調査面積は約180m²であり、縄文時代中期後葉~後期初頭の貯蔵穴3基・第1次調査区と連続する流路（第1~4号流路）4条・古墳時代中期（5世紀後半）の柱穴群・流路（古代、第1~2号流路）などが検出されている。
(註) 「野多目古墳遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第120号」 1986.3、福岡市教育委員会

第3次調査 第1次調査区の南西側に位置し、農道拡幅時の調査である。

調査は、1986(昭和60)年3月のものである。検出遺構として縄文時代晚期貯蔵穴4基、溝3条、河川2条があり、他に溝3条およびピット群がある。晚期貯蔵穴からはイチイガシを主体としたドングリが出土し、遺構の機能を裏付けている。また土器類も同時に出土し、これらから時期的に晚期中葉と考えられている。
(註) 「野多目古墳遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第100号」 1987.3、福岡市教育委員会

野多目古墳遺跡 野多目C遺跡群の東側に位置し、住宅・都市整備公団の野多目団地開発



Fig. 9 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 大鷦E 遺跡
2. 野間B 遺跡
3. 野間A 遺跡
4. 大鷦A 遺跡
5. 若久B 遺跡
6. 若久A 遺跡
7. 大鷦B 遺跡
8. 大鷦C 遺跡
9. 大鷦D 遺跡
10. 二宅A 遺跡群
11. 三宅岩野瓦窯址
12. 和田田藏
池遺跡
13. 三宅C 遺跡群
14. 三宅B 遺跡群
15. 和田A 遺跡群
16. 和田B 遺跡群
17. 野多目B 遺跡群
18. 野多目A 滾道跡
19. 野多目A 遺跡群
20. 野多目C 遺跡群
21. 朝内尺古墳群
- 22-24. 济永原遺跡
群
25. 上日佐遺跡
26. 日佐遺跡群
27. 寺山遺跡群
28. 橋子遺跡群
29. 井尻C 遺跡群
30. 井尻B 遺
跡群
31. 井尻A 遺跡群
32. 五十川遺跡群
33. 諸岡A 遺跡群
34. 那珂遺跡群
35. 下高木遺跡

に伴って調査が行なわれた。

調査は、1982(昭和57)年2～3月になされ、標高12m程の沖積地に2ヶ所の調査区が設けられた。

南側の第1調査区では2条の溝造構と壙状造構が検出され、壙状造構付近より古代の瓦が出土している。またこれの北側100mの第2調査区では南北溝（奈良時代）1条と近世溝2条（16～18世紀）がみつかり、各れも生産遺跡の一部を形づくるものである。遺物も造構と当該期のものに他に縄文時代中期土器、6世紀前後の須恵器・土師器などが出土している。

(四)「婚姻自主及個體消能」作為一個社會問題，是屬於文化問題還是法律問題？

「桃園市裡頭文化財調查報告書第185號」 1854. 桃園市教育局

野多目前田遺跡 (Fig. 1-17、野多目B遺跡群) 市立野多目小学校建設に先立って1979(昭和54)年11月～1980(昭和55)年6月に発掘調査がなされた。

調査は、校舎建設部分と周辺擁壁部をあわせて4ヶ所にわたり（第Ⅰ～Ⅳ調査区）、調査面積は7158.5m²に及ぶ。

調査区東縁(第1調査区)が最も遺構・遺物の密度が高く、遺構は表土層下第4層(褐色粘

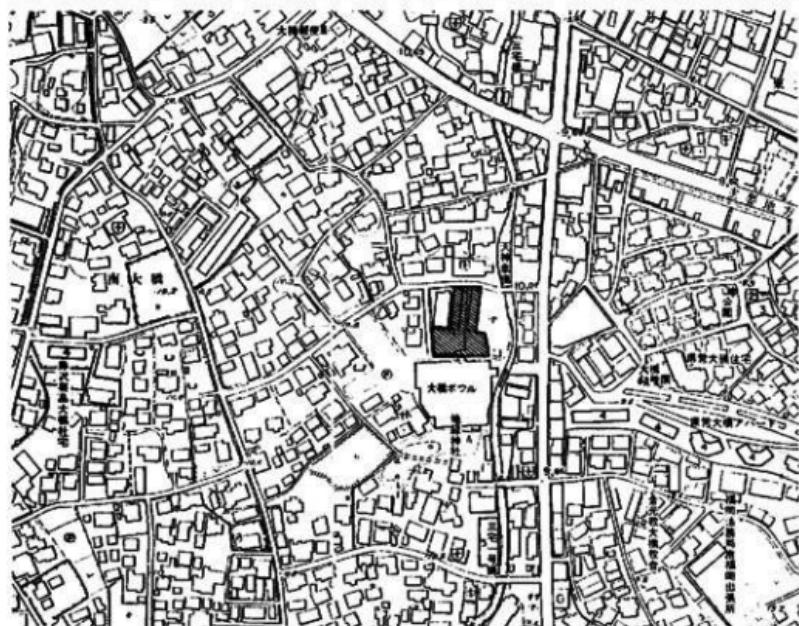


Fig. 10 大橋南公園調査地点図 (1/4,000)

土層)、第6層(暗灰～灰白色シルト～粗砂層)および鳥栖ローム層に掘込まれたものである。

最下層の鳥栖ローム面では、2条の溝状遺構(第2・3号)がある。このうち第2号溝は幅1m、深さ50cm程の溝で護岸の杭列をともなう。埋土中より須恵器高台付壺・瓦類が出土し、奈良末～平安の時期である。また第3号溝は幅10m、深さ1m程の奈良時代流路であるが、該期の土器類の他に西岸の埋土(黒色粘質土)中より5世紀代の祭祀遺物(ミニチュア土器・土製模造鏡・土製勾玉・土玉・滑石製有孔円盤など)がまとまって出土した。更に同溝最下層より内行花文鏡片が見付かっている。

第6層では、溝1条、溜状遺構2で各れも鎌倉期のものである。

また第II～III調査区では中世期の溝1条や弥生時代前期初頭(?)の溜状遺構が検出された。

(註)「福岡市野多目前述跡調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集」 1982. 福岡市教育委員会

他に那珂川左岸地域では、遺跡北西1.5km程の高宮A遺跡群(高宮八幡宮一広形銅鉢・広形銅戈鋒型)や古墳時代から古代にかけての遺跡群(Fig. 1-2~21)が分布している。

(註)「福岡市南区野間B遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集」 1989. 福岡市教育委員会

一方、那珂川右岸地域は大遺跡群が多く、弥永原遺跡群(Fig. 1-21~24)、弥生時代後期集落および墳墓群・古墳時代集落址)、井尻日遺跡群(Fig. 1-30、井尻大塚古墳(前方後円墳)および弥生後期集落址)、諸岡A遺跡群(Fig. 1-33、弥生時代前期末～後期初頭塚壇墓地・前中期末の朝鮮系無文土器を出土した竪穴群や中世期の地下式土壙群など)、那珂遺跡群(Fig. 1-34、弥生中期大集落址・同期墳墓群・古代建物群など)、那珂深ラサ遺跡(Fig. 1-35、古墳時代～中世期の水田址)などが知られている。

(註1)「福岡市永原遺跡調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集」

「福岡市永原遺跡調査報告書」福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会 1987年4月

「福岡市公園周辺埋蔵文化財調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集」 1990.3. 福岡市教育委員会

(註2)「井尻B遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集」 1988. 福岡市教育委員会

(註3)「那珂周辺遺跡調査報告書1」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集」 1974. 福岡市教育委員会

「那珂周辺遺跡調査報告書2」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集」 1975. 福岡市教育委員会など

(註4)「那珂遺跡－那珂遺跡群第8次調査の報告」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集」 1987. 福岡市教育委員会など

(註5)「福岡市博多区那珂川町ラサ遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集」 1981. 福岡市教育委員会

「那珂川ラサ遺跡2」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集」 1982. 福岡市教育委員会

第3章 調査の記録

I. 第1次調査

1. 調査概要

福岡市南部の大橋周辺は都市開発が著しい。殊に老司から野多目・三宅と続く低丘陵地帯の住宅化は早く、1979（昭和54）年に実施した分布調査では遺跡としては把握されていなかった。

1986（昭和61）年9月26日、建設中の「大橋南公園」の用地内から土器片が出土した旨の連絡が公園建設課からあり、現地踏査を実施した。現地では地中管の埋設土に混じって弥生式土器を探集し、当該期の遺構の存在が予想され、遺跡の保存を含めた善後策についての協議をおこなった。その結果、公園の建設は既に埋設管の布設等もほぼ終了し、現状の変更と本格調査は困難との結論に達したが、遺跡の広がりと性格を摑むための試掘調査を9月29日に実施した。試掘は当該地の中央に東西方向のトレンチを南北に2本(ATr, BTr)設定して行なった。その結果、トレンチ中央より東側は急激な段落ちとなり、遺構はなかった。しかし、西側では柱穴が確認されたため、さらに西側に調査区を設定して内容の把握に努めた。

調査は10月1日～2日に実施した。調査区は埋設管が中央部で交差している為南北に区分し、北側をI区、南側をII区とした。その結果、I区では土壤の外溝状遺構と柱穴が密に分布し、II区でも柱穴を多数検出した。この中には獨立柱建物跡の柱穴らしきものもあるが、調査区が狭い為建物跡としてはまとまらなかった。I区の包含層から網形銅劍の鋳型片が出土した。

2. 調査の記録

1) 土壌

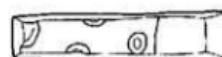
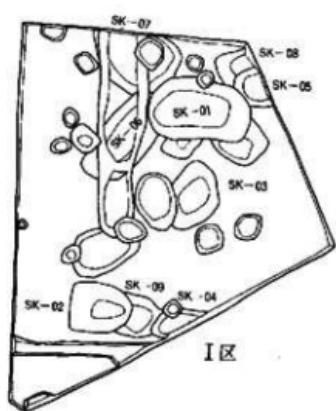
土壌は9基検出した。土壌は調査区北側の第I区にまとまって分布し、第II区には1基もない。土壌はSK-01・06・07を除いては小型のもので、建物跡の柱穴かとも思われるものがある。遺物は弥生時代中期のものが主体をしめ、時期的な特定は容易である。また、大型土壌の平面形は隅丸長方形と類似するが、その性格等は明らかでない。

SK-01(Fig. 12. PL. 4)

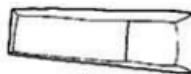
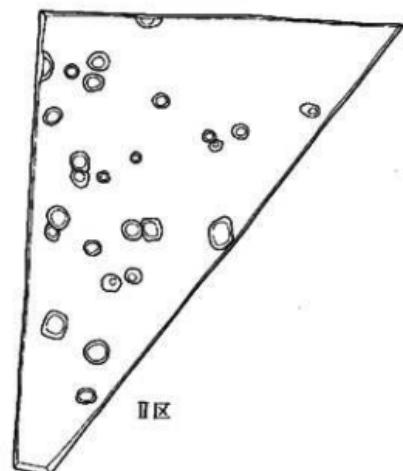
第I区の北東にある。東側はSK-05・08と西側は06・07と重複し、この中で最も新しい。平面形は長軸180cm、短軸102cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向をN-80°-Wにとる。浅い舟底状の底面は深さ45cmで、緩やかに西へ傾斜する。遺物は弥生中期～古墳時代の壺・甕等が多く出土した。覆土は(1)茶褐色土、(2)暗褐色土層に区分されるが、層位による時期差はない。

出土遺物(Fig. 13-15-19)

00001～00014は上層、00015～00038は下層より出土した。00012は鋤先口縁をもつ壺で調整はヨコナデ。小砂粒を含んだ、淡茶褐色の胎土である。00001は刻み目突窓をもつ甕の胴部である。外面は突窓部がヨコナデの他はハケ目、内面はナデ調整する。小砂粒を密に含む黒灰色の



+



+

0 5m

Fig. 11 第1次調査区造構配置図 (1/100)

粗い胎土である。00003～00005は逆「L」字口縁をもつ壺で、口縁下に三角突帯が1条巡る。00003は口縁から突帯下までがヨコナデの他はハケ目、内面はナデ調整。細砂粒を含むが胎土は精良である。00004・00005は口縁部から突帯下までヨコナデ調整し、内面はナデ調整する。00002は鋸先口縁をもつ壺。外面は口縁部がヨコナデの他はハケ目、内面はナデ調整。00006・00008～00010は壺の底部。外面はハケ目、内面は指押え後ナデ仕上げ。00007・00011は壺の底部。内外面ともナデ調整。00013・00014は器台。端部周辺はヨコナデ、外面はハケ目、内面はナデで仕上げ、細砂粒を少量含む。00001が弥生時代前期、他は中期に比定できる。

00029～00033は壺。00033は径2.5cmの小さな底部を有する。口頭部はヨコナデ、外面はハケ目調整後軽くナデ、内面は放射状に強いナデを施す。古墳時代前期のものと思われる。00030は内面が横方向の研磨、外面はヨコナデ調整後に暗文を施す。淡茶褐色の精良な胎土で内外面とも丹塗りである。00032の調整は口頭部内外面、胴部外面がヨコナデ、胴部内面はナデ。淡黄灰色の精良な胎土である。00031は口唇部がヨコナデ、口頭部外面はナデ調整後、縱方向の暗文、口頭部内面及び胴部外面は横方向の研磨、胴部内面はナデ調整する。赤褐色を呈する精良な胎土である。00029～00032は弥生時代中期のものである。

00036・00037は夜臼式壺の胴部片である。00037は外面がヨコナデ、内面はナデ調整。小砂粒を多く含む灰茶褐色の胎土である。00036の外面は突帯付近がヨコナデ、他は条痕、内面はナデ調整を施す。小砂粒を含んだ灰褐褐色の胎土である。00038は板付Ⅱ式の壺で内外面はヨコナデ調整し、口縁下端に刻み目を施す。小砂粒を多く含む黒灰褐色の粗い胎土である。

00015・00016・00018・00020・00022～00024は壺。ただし00022は壺の可能性を残す。00016・00022～00024は小片である。

00018・00020は接合しないが同一個体の可能性が強い。調整は口縁部がヨコナデ、胴部はハケ目、内面は指おさえ後ナデ仕上げ。細砂粒を含んだ灰褐褐色の胎土である。00015は鋸先口縁をもち、口縁下に三角突帯が1条巡る。口縁内側から突帯下はヨコナデ、胴部外面は2種類の原体を用いてハケ目調整する。内面はナデ。大小の砂粒を多く含む茶褐

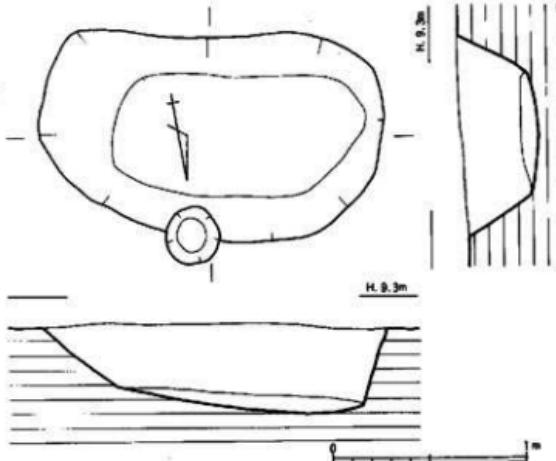


Fig. 12 SK-01実測図 (1/30)

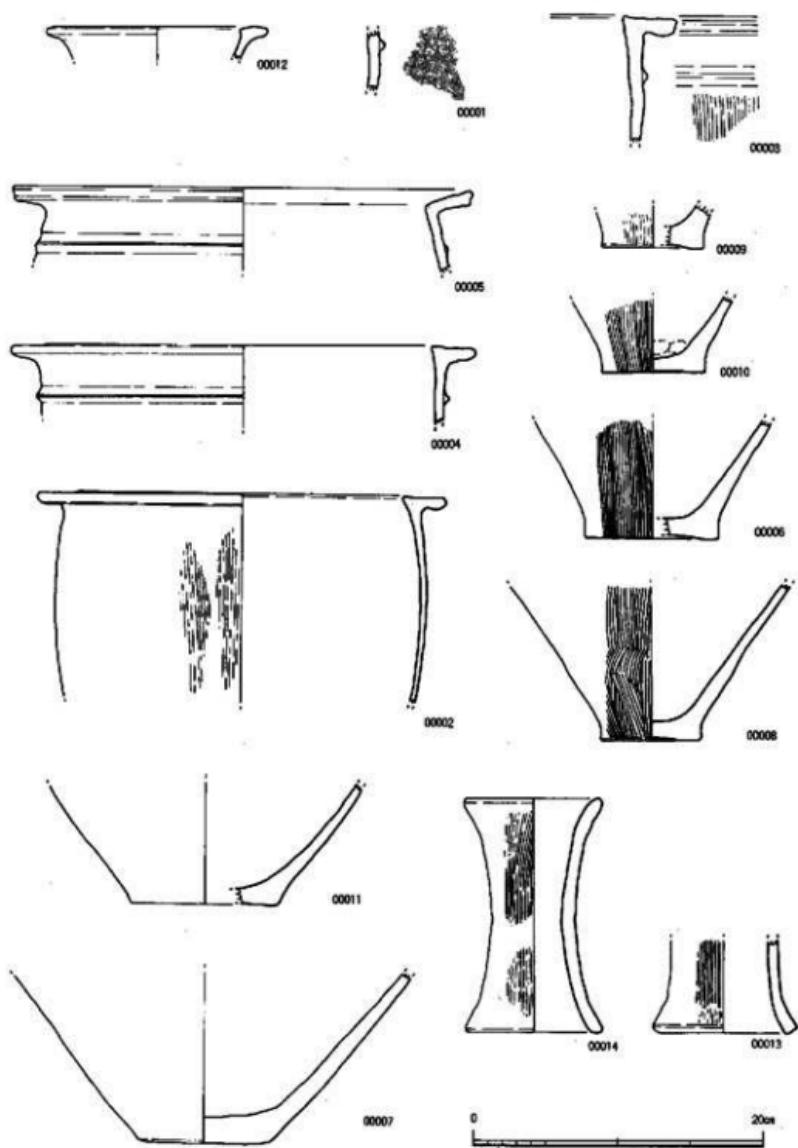


Fig. 13 SK-01上層出土遺物実測図 (1/4)

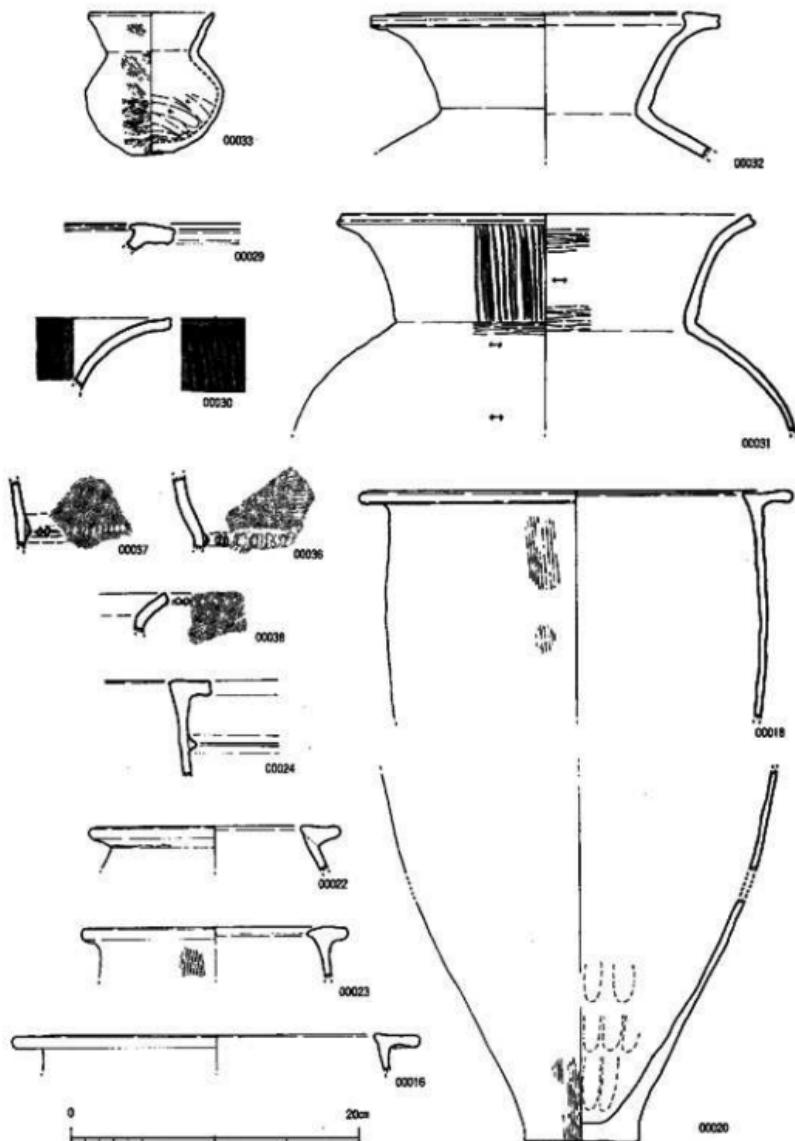


Fig. 14 SK-01下層出土遺物測量圖 (1) (1/4)

色の粗い胎土である。00021・00025～00028は壺の底部。外面はハケ目調整、内面はナデ調整するが、00025・00027は底部付近に軽くヨコナデを施す。00021は内面に指頭痕が多く残る。00019は鉢。逆「L」字状の口縁をもち、口縁下に三角突帯が1条巡る。口縁部内側から突帯下までヨコナデ、胴部外面はナデ調整、内面は丁寧なナデ仕上げ。細砂粒や褐色砂粒を含むが、良質の胎土である。00035は肉厚の支脚である。茶褐色の精良な胎土を用い、手捏ね整形する。表面は指頭痕が多く残り、粘土の離ぎ目も明瞭で凹凸が著しい。00017は器台。外面はハケ目、端部から内面にかけてはヨコナデ調整する。茶褐色の良質な胎土である。00034は蓋である。

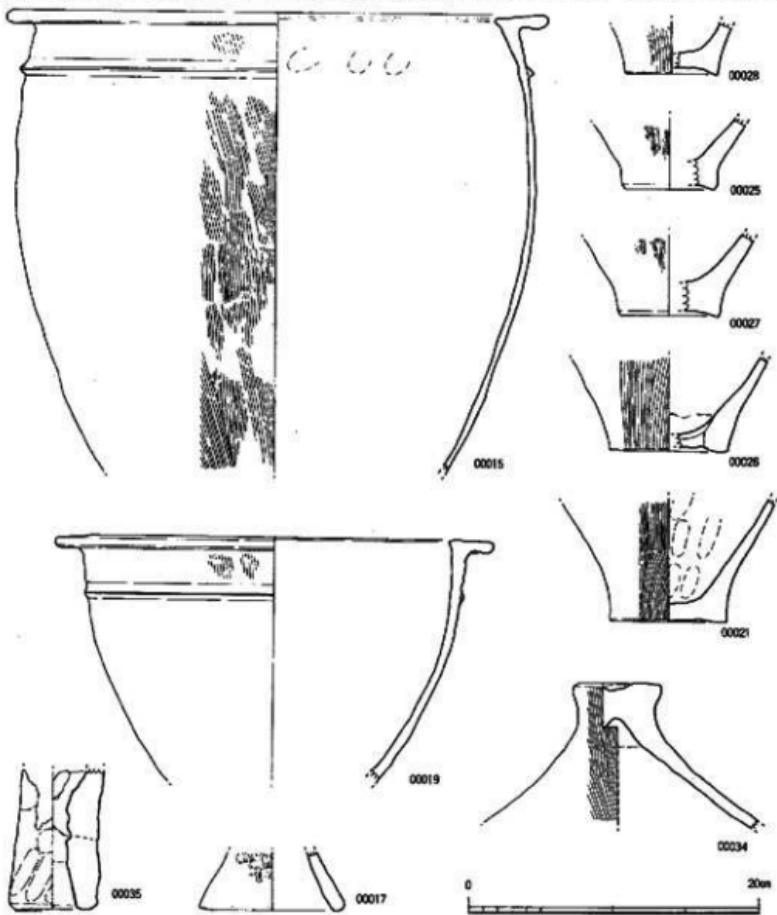


Fig. 15 SK-01下層出土遺物実測図 (2) (1/4)

外面はハケ目、横み部上面はナデ調整し中央が凹む。内面はナデ仕上げ。小砂粒と褐色砂粒を多く含む赤褐色の胎土で、堅く焼きしまる。以上は弥生中期の遺物である。

10006は抉入片刃石斧の刃部で、風化による磨耗が著しい。現長8.0cm、重さ150g。

SK-02 (Fig. 16)

第I区の南側に位置する。東側はSK-09と重複し、新しい。平面形は長軸100cm、短軸87cmの方形を呈し、深さは75cmを測る。底面は浅い凹レンズ状をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土中からは弥生後期～古墳時代の甕等が出土したが、量的には少ない。

出土遺物 (Fig. 18)

00039は鋤先II線をもつ甕でヨコナデ調整で仕上げる。小砂粒を含むが、精良な胎土である。00040は甕の底部で、内外ともナデ調整する。胎土は小砂粒を多く含み粗い。00039・00040は弥生時代中期に属する。00041は土師器の小型器台である。环部内底には焼成前に径5mm程の穿孔を施す。环部外面はヨコナデ、内面はナデ調整、脚部は内外面ともナデ調整する。細砂粒を少量含むが胎土は精良である。古墳時代前期に比定できる。

SK-03 (Fig. 11)

第I区の中央部、SK-01の南にある。平面形は不整方形を呈し、長軸110cm、短軸85cm、深さ65cmを測る。上輪方位をN-59°-Eにとる。弥生中期の甕片が少量出土した。

出土遺物 (Fig. 18-19)

00042～00044は逆「L」字状口縁の甕である。00044は口縁部付近をヨコナデ、胴部外面をハケ目調整後ナデ。00043の口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目。外面に煤が付着する。内面はすべてナデ調整。いずれも弥生時代中期のものである。10001は手持型の砥石であろう。

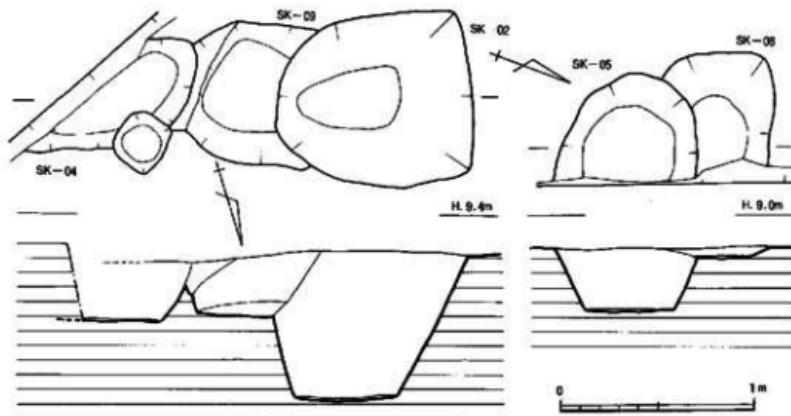


Fig. 16 SK-02-04-05-06-09実測図 (1/30)

全長2.7cm、厚さ1.0cm、重さ5.3g。表裏・両側面の4面を研ぎ、端部は両側面から刃状に研ぎだす。

SK-04 (Fig. 16)

第1区南部に位置し、東側は調査区外にあるため全容は明らかでない。西側はSK-09と重複し、これより新しい。主軸方位はN-84°-Wにとる。短軸は54cmを測り、平面形は長方形になる。底面はほぼ平坦で、深さは29cmを測る。

出土遺物 (Fig. 18)

00045は甕である。「く」字状の口縁部はわずかに内弯し、球形の胴部がつくものであろう。口縁部はヨコナデ、肩部にハケ目が残る。細砂粒や褐色砂粒を少量含む。布留式土器に並行するものである。

SK-05 (Fig. 16)

第1区の北東隅に位置し、東側は調査区外にのびる。西側はSK-01・08と重複し、SK-01よりも古い。平面形は短軸が58cmを測る隅丸長方形になるものであろう。底面はほぼ平坦で、深さは33cm。

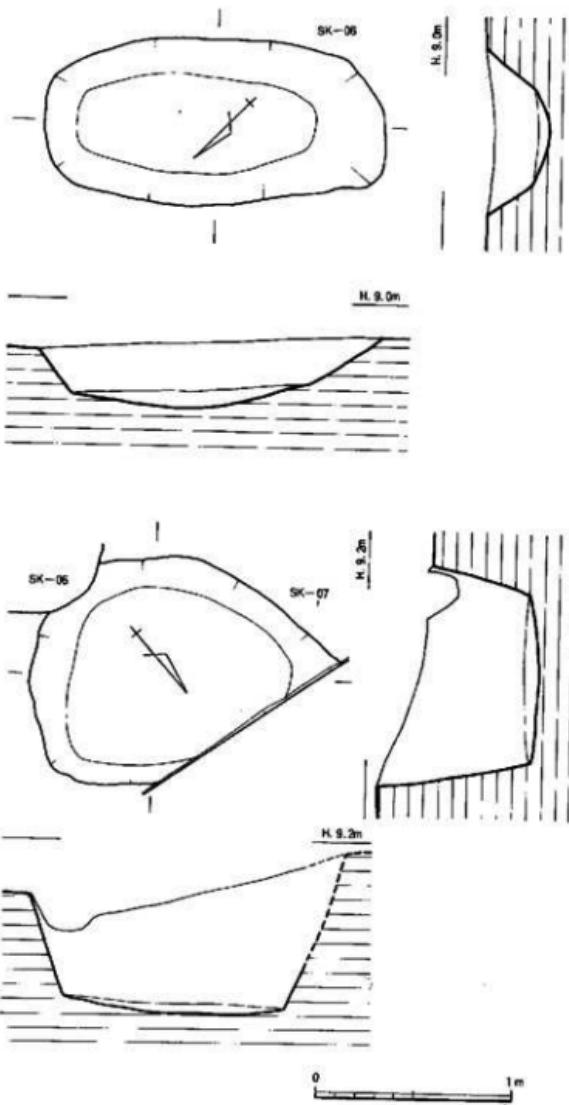


Fig. 17 SK-06・07実測図 (1/30)

SK-06 (Fig. 17)

第I区のほぼ中央部にあり、北側がSK-01・07と重複する。SK-07より新しく、SK-01よりも古い。平面形は長軸176cm、短軸85cmの隅丸長方形を呈し、深さは38cmを測る。壁面は緩く立ち上がり、浅い舟底状をなす底部は中央部が低くなる。主軸方位はN 44.5°-E。覆土中から弥生式土器・土師器片が少量出土した。

出土遺物 (Fig. 18)

00047は壺の小破片である。直線的にのびる口縁部は端部をがわざかに擒み上げている。ヨコナデ調整で仕上げ、胎土は細砂粒を少量含む。二次的焼成により、胎土は灰色を呈する。古墳時代初頭のものである。00046・00048は弥生中期の壺である。00046はラッパ状に聞く頸部に小さい鋤先口縁がつく。口縁付近はヨコナデ調整。小砂粒を含んだ粗い胎土である。00048は強く屈曲し、ラッパ状に聞く短めの口頸部をもつ。口頸部外面をヨコナデ、内面を研磨に近い丁寧なヘラナデ調整する。00049は弥生中期の壺の底部である。外面が風化のため調整不明。内面はナデ調整。胎土は濃い赤褐色を呈し、大小の砂粒を多く含み粗い。

SK-07 (Fig. 17)

第I区の北部に位置し、西側は調査区外にのびる。南端はSK-01・06と重複し、最も古い。主軸方位はN 42.5°-Wにとる。平面形は長軸が160cm、短軸が115cmの隅丸長方形になろう。

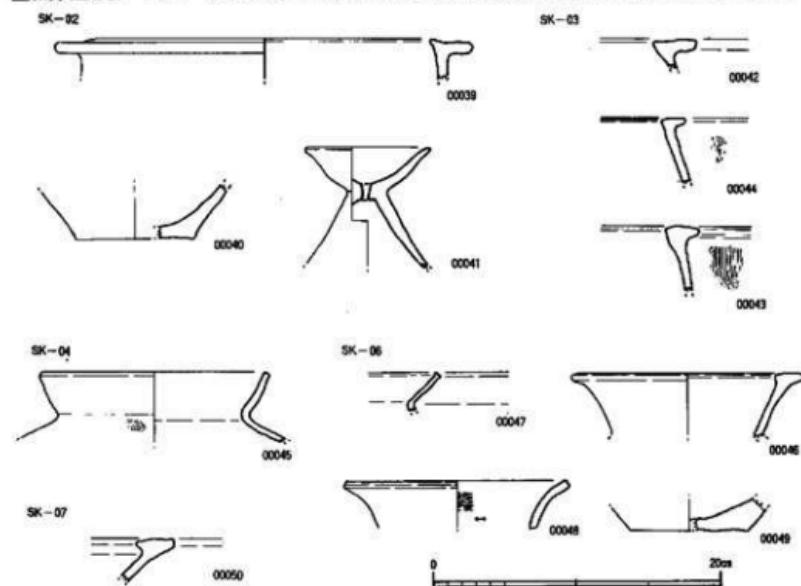


Fig. 18 SK-02~04, 06, 07出土遺物実測図 (1/4)

遺物は少ないが、弥生～古墳時代の甕・器台等が出土している。

出土遺物 (Fig. 18)

00050は鋤先口縁をもつ甕である。口縁内面から外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。細砂粒を少量含むが、胎土は精良である。

SK-08 (Fig. 16)

第Ⅰ区の南東隅にあり、東側は調査区外に拡がる。南側はSK-01・05と重複し、最も古い。全容は不明であるが、平面形は方形になろう。遺物は弥生中期の甕片等が少量出土した。

SK-09 (Fig. 16)

第Ⅰ区の南側にあり、SK-02・04と一緒に並ぶ。東側SK-04は、西側はSK-02に切られている。平面形は50×70cmほどの方形プランになろう。深さは27cmを測り、底面は平坦である。

2) 包含層出土の遺物

公園建設中の表探遺物及び造構検出時の遺物は一括して包含層出土の遺物とした。

出土遺物 (Fig. 20～22)

00053は十師器の小型甕。手捏ね風の雑な整形でいびつである。口縁内側から胴部外面はナデ調整するが、口縁部内側はハケ目が部分的に残る。内面はケズリを施す。細砂粒を含むが精良な胎土である。古墳時代前期に属する。00052は甕の底部。外面はハケ目、内面はナデ調整。00051は蓋であろう。外面はハケ目、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整する。大小の砂粒を密に含み、淡黄灰色の粗い胎土である。00051・00052は弥生中期に比定できる。

10003は敲打石である。先端部に2.5×1.5cmの範囲に打面が残る。長さ23.0cm、重さ1,610g。10004は片刃石斧の未製品であろう。両側面に研ぎ痕がみられる。現長9.5cm、幅4.4cm重さ153g。10005は砥石である。砥面は4面あり、中央が凹レンズ状に凹む。現長10.5cm、295g。50001は淡いコバルトブルーのガラス玉である。径4.5mm、孔径1.5mm。

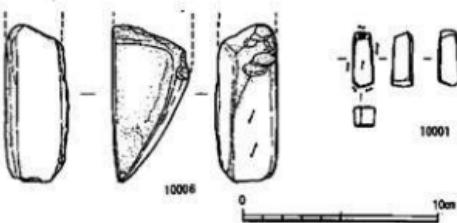


Fig. 19 SK-01-03出土石器実測図 (1/3)

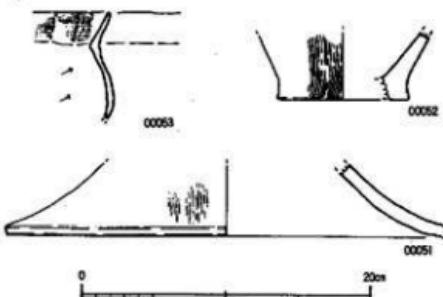


Fig. 20 包含層出土遺物実測図 (1/4)

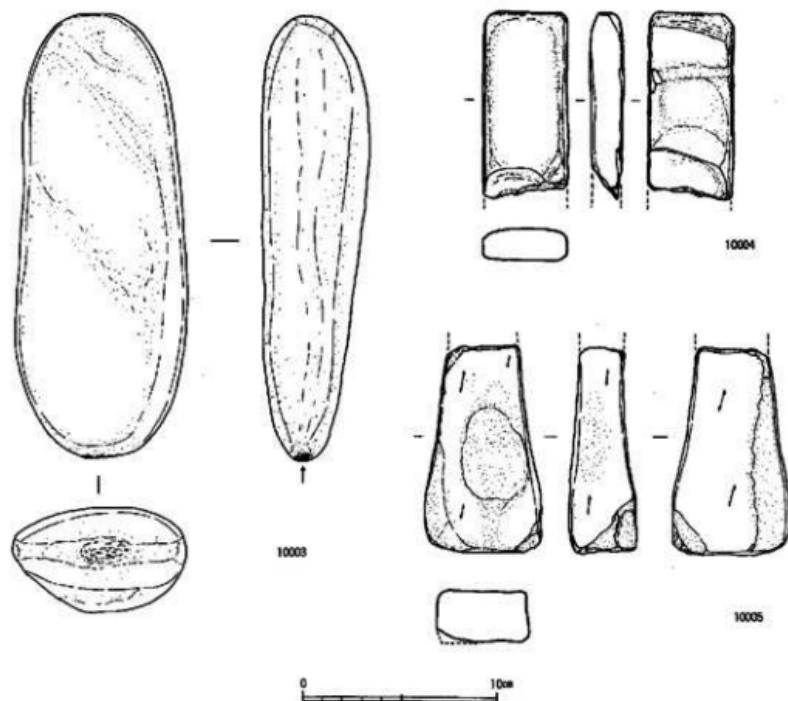


Fig. 21 包含層出土石器実測図 (1/3)

鉄型 (Fig. 23, PL. 4)

現存の長さが3.7cm、幅2.0cm、厚さ3.1cmの鉄型の小破片である。

上面左側は彫り込んだ型の面で、現存長2.7cm、幅1.1cmを測る(a面)。この面に接する右側はさらに一段深く彫り込まれ、長さ2.8cm、幅0.2cm、深さ0.3cm前後を残し、かすかに湾曲した面をなす(b面)。この面の右側は深さ0.8~0.9cm、幅0.6cmのL字形の面で、砥石転用時の研ぎ面である(c面)。これ以外の面—両側面・裏面・両端面は折損面で細かい凹凸があり、加工したり研いだ痕跡はない。石の質は北部九州地域の弥生時代青銅器鉄型の大多数と同じく、ざらつくが緻密で、色はほぼ白色である。

鉄型として使用し、高熱にあって黒色になったのはa面とb面のすべておよびc面のb面側の幅0.2ないし0.3cmの部分である。a面はかなり黒く、b面も黒く、c面はうっすらと黒いがb面からはなれると徐々に薄くなり、石の本来の色—白色になる。これによって、溶銅が直接触れたのはa面とb面で、c面は直接触れた面の内部であったことがわかる。すなわち、c面上部の黒変部は、b面



Fig. 22
包含層出土
五実測図
(2/3)

に接して黒変した石の内部が、折損後の砥石利用でc面が形成された結果、表面に表れたものとみられるのである。

このように考えれば、b面は深さ0.5cm、幅1cmほどの背状の断面半円形の彫り込みであり、a面はこの左右に続く葉部となり、この鋳型が銅剣の鋳型であったと推定できる。

さらに裏面（a面の反対側）は折損のため山形をなしているが、その頂部の 0.9×0.7 cmほどの範囲も薄黒く焼けている。これも型表面に接する石の内部であったとみられ、この鋳型が厚さ3cm数mmの両面鋳型であった可能性を示す。

銅剣の両面鋳型は春日市大谷遺跡で発見されているが、石材はことなる。朝鮮半島では全羅南道靈岩等で出土している。

両面鋳型であることと背断面の大きさ（推定値）から、これは細形銅剣の鋳型とみられる。那珂川左岸の鋳型としては、高宮八幡宮の鋳型5点を除くと、はじめての出土である。

3. 小 結

本調査は、公園建設中の限られた調査であり、十分な成果はあげられなかった。しかし、当地域における文化財調査の第一歩としての意義は大きい。検出した遺構は、土壙と柱穴で、集落城本体の解明にはいたらなかつたが、その手がかりとはなり当地域の弥生時代中期から古墳時代にかけての有里様の一端を窺い知ることができよう。また、鋳型は那珂川左岸地域では2例目の発見であり、その背景となる生産集団の存在を窺わせる。その集落構成の解明とともにその詳細な検討が今後の課題である。

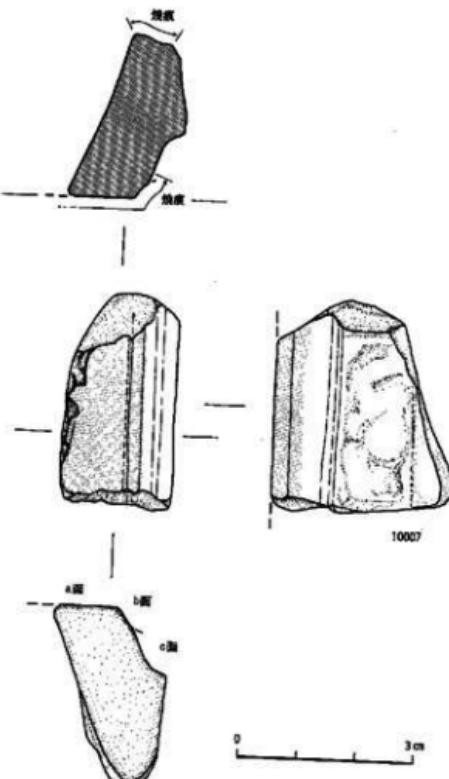


Fig. 23 包含層出土鋳型実測図 (1/1)

II. 第2次調査

1. 調査概要

対象地は以前に武道場が建っており、これによる擾乱も予想された。更に第2次調査は既設の大橋南公園の拡張であり、調査にあたっての堆土の扱いと表土掘削の重機の搬入が困難をきわめた。

また調査における重機の騒音も問題となり、迅速かつ効果的な調査方法が想定される必要があった。

調査は、まず東半部を行ない、次いで西半部を行なうこととし、1988年7月23日に調査を開始した。

調査では旧表土面上に70cm程の盛土がなされていることが判り、これを除去すると旧表土からは30cm程で造構の検出できる灰～灰白色粗砂層に到った。

造構は予想通り西半部で旧建物の柱掘方による擾乱により旧状を保つものが少なかった。確認できた造構の種類は土壌9（S X01～09）基、溝状造構4条であり、比較的整った造構は少ない。時期的に区別できるのは土壌2基（S X01・06）であり、S X01土壌は弥生時代中期後葉、S X06土壌は同前期の所産と考えられる。また溝状造構は土壌として完結する可能性をもつものもあるが、3条（S D01a・01b、S D)02が中世期で、他の1条は時期不詳である。以下調

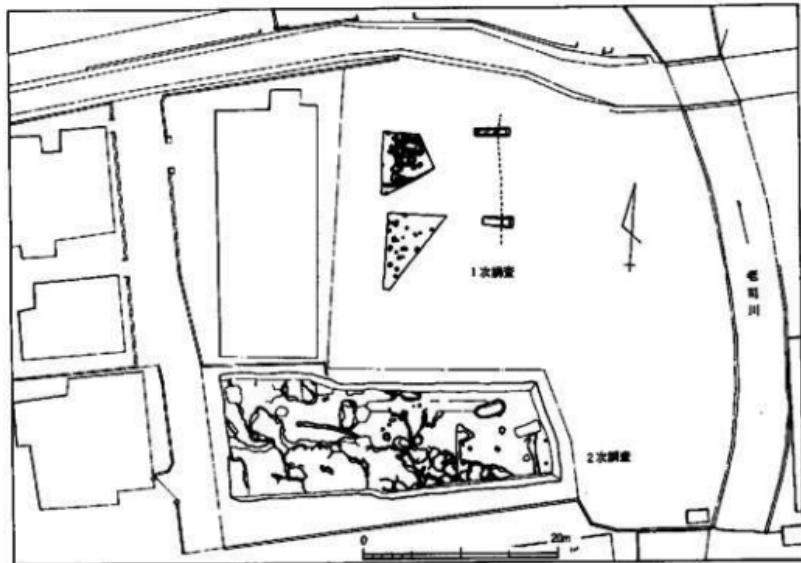


Fig. 24 第2次調査区位置図 (1/600)

査の遺構および出土遺物について詳述することとする。

2. 調査の記録

調査地の層序 (Fig. 28)

調査区各壁面および東半部調査時の西側壁面 (F-E) を示した。

調査区南壁 (A-B) では上層より80cm前後の埋土 (第1層)、次いで旧表土 (第2層) がありこの下には全面でなくしレンズ状に淡灰褐色砂土 (第3層-8~10cm) がある。更に東側に一部ではあるが暗褐色粘質土 (第4層) がみられる。西側ではSX02土壤埋土と同一の第9層 (淡茶褐色土-黒色粘土ブロックを多く混じ、土器の混入多く、土層としてのしまりが全くないう) が厚く堆積し、この下に一部ではあるが暗橙色粘質土 (第10層) がみられ、この下が地山である第11層 (淡黄褐色シルト) に至る。他は遺構埋土が全てである。

北壁は 西半部が搅乱により一部旧表土下が暗褐色粘質土となっている。

西壁 (B-F) は 一部北側で地山上に暗茶褐色砂質土がのる以外は南壁西半部と同様に地山 (第11層-淡黄褐色シルト) 上に30~100cm (南側) 程の淡茶褐色土 (第9層) がのる。

また調査区中央部の南北壁面 (F-E) は中央部付近のSX02土壤線辺付近で埋土に淡黄褐色土、淡灰白色粗砂をブロック状に含むが、他は同様の層序となっている。

検出遺構 (Fig. 26~38. PL.)

1) 土壌

SX01土壌 (Fig. 26-27-29-30-37. PL. 6-7)

調査区北東部隅近辺で検出した隅丸長方形の土壤である。規模は長・短径が3.1×1.3m、深さ22~44cmを測る。壁面は比較的ゆるやかに立ち上り、中央部床面付近を中心に多量の遺物が出土した。埋土は黒色粘土で殆どが占められる。

出土遺物 (Fig. 27-29-30-37. PL. 9-10)

出土遺物では土器類が最も多く、甕類では外面に煤を有し、内底部に焼けこげのある例もみられる。

甕形土器 ①縁端部が薄く、差々内傾するもの (00040-00032-00026)、平坦口縁をなし、端部が肥厚して口縁下に突帯がつかないもの (00019-00017-00027-00008-00034)、平坦口縁をなし、口縁下に一条の三角突帯を廻らすもの (00006-00041-00039-00016-00004-00002) とに区別される。

00040は器色明赤褐色を呈し、胎土に石英砂混じる。焼成良好。復原口径27cm。00032は薄手の甕で、器色漆褐色を呈する。胎土に1~2mmの石英砂混入多し。焼成良好。復原口径27cm。

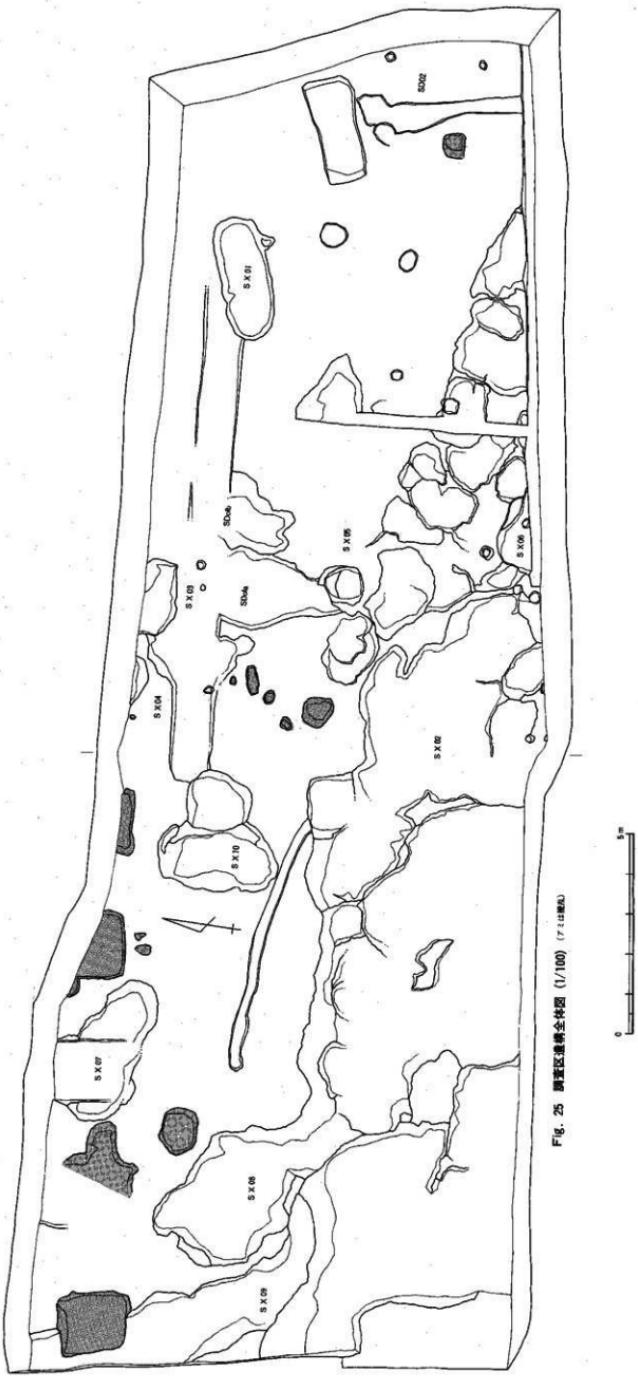


Fig. 25 調査区地図全体図(1/100) (72年版)

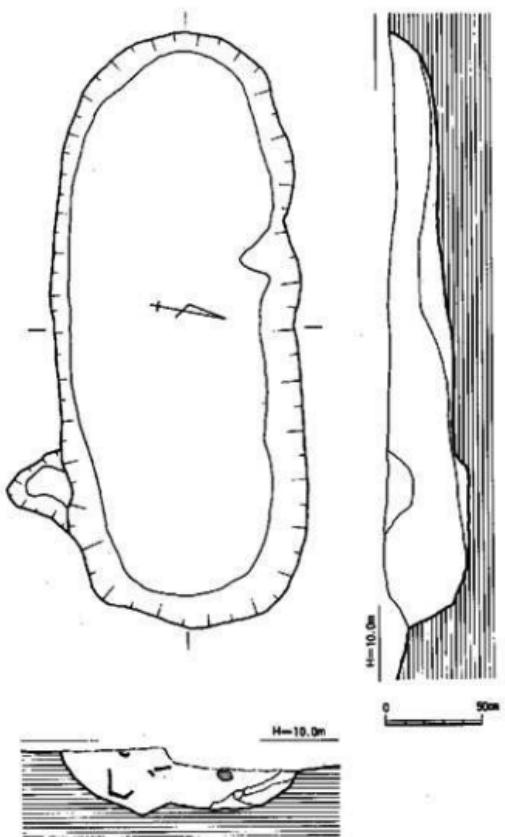


Fig. 26 SX 01 土壌出土状況実測図 (1/30)

00019は口縁外端部が肥厚する。器色は外面黄褐色、内面淡赤褐色を呈し、焼成良好である。胎土に石英砂混じる。復原口径29cm。00017は器色が外面暗褐色、内面灰褐色を呈し、焼成良好である。胎土に石英砂を多く混入。復原口径32cm。00027は器色が外面淡赤褐色、内面赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。復原口径29.8cm。00008は器色が外面淡桃色、内面淡赤褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多し。復原口径32.2cmをはかる。外面胴部にタテ刷毛目を残す。00006は短い平坦口縁下がやや肥厚し、この下に低い三角突帯を1条めぐらす。器色は外面褐～暗褐色・内面暗灰褐色を呈する。胎土に石英砂

の混入多く、焼成良好。突帯以下にタテ刷毛目を残す。復原口径29cm。00005も口縁下端が肥厚する小破片である。器色外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈する。胎土良好。焼成堅緻。00003は平坦口縁下に一条の突帯をめぐらす小破片である。器色は外面黄褐色、内面淡赤褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多し。焼成良好。厚手である。00015は外底部がややあげ底となる。外面にあらいタテ刷毛目を残す。器色は外面暗褐色、内面淡褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多し。焼成良好。底径7cm。00023も同様な形態をとる底部である。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈する。胎土に石英砂多し。焼成良好。

00034は、器色外面暗褐色～明茶褐色、内面黒褐色を呈する。平坦口縁下には突帯を有しな

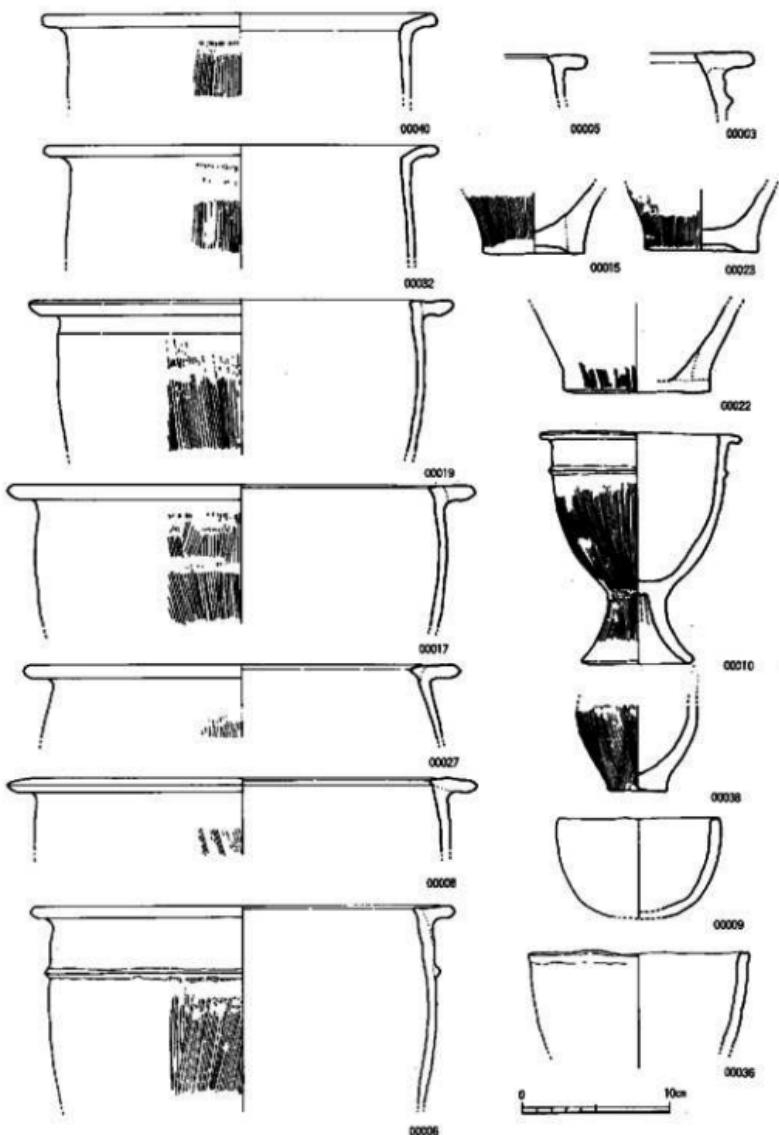
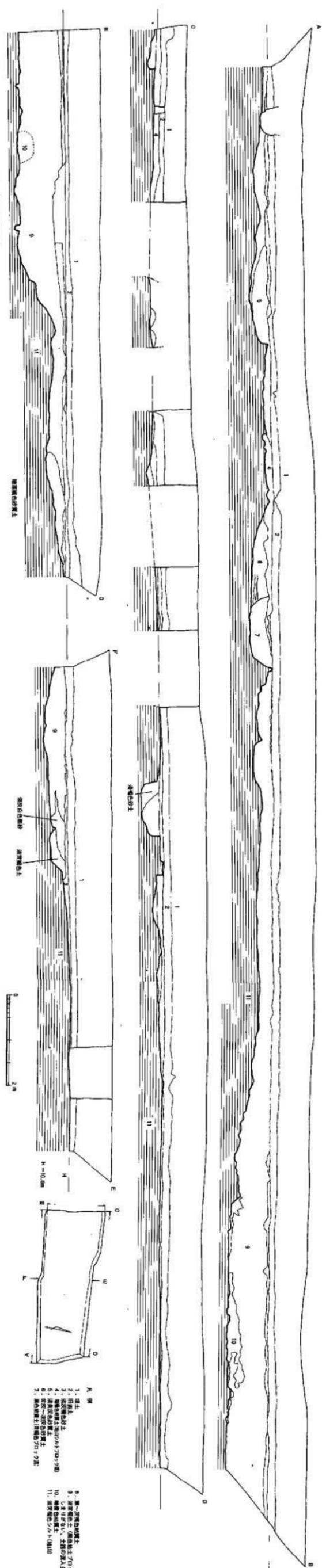


Fig. 27 SX 01 土壤出土物実測図 (1) (1/4)

Fig. 28 調査区土壤断面測定図 (1/60)



い薄手の壺である。胎土には石英砂の混入多く、焼成は良好である。復原口径31.4cm、器高33.2cm、底径6cmをはかる。00026は口縁がく字形に内傾する薄手の壺である。口縁直下を除き、荒いタテ刷毛目を施す。底部はややあげ底となる。器色は外面黒一暗褐色、内面淡赤褐色を呈する。胎土に石英砂を多く混入する。焼成良好。復原口径28.4cm、器高33.5cm、底径7cmをはかる。00041も緩く内傾する口縁下に低い三角突帯をめぐらす薄手の壺である。器色は赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。復原口径31.6cm。突帯下にタテ刷毛目を残す。00039は屈曲する口縁内面に棱を有し、外面に突帯をめぐらす。器色暗褐色を呈し、焼成良好。00016は、緩く屈曲する口縁下に突帯をめぐらす。器色は内外面ともに淡赤褐色を呈する。復原口径35cm、00004は平坦口縁を有し、胴部がふくらむ。器色は内外面ともに黄褐色を呈し、焼成は良好。復原口径39.2cm。00002は肥厚する平坦口縁を有し、胴器壁は薄い。器色は内外面ともに赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。復原口径32cm。00021は胴上半部を失う。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。底径7.8cmをはかる。00024は夜白式土器壺胴部である。器色は外面赤褐色、内面灰赤褐色を呈する。焼成は良好。

壺形土器 壺は口縁形態が朝顔状にひろくものや鋤先状をなすものがあるが、全体に出土量は少ない。

00022は、器色外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成は堅緻である。復原底径10cmをはかる。00028は一寸異形であるが所謂「ひさご形」土器の上半部破片である。器色は外面淡赤褐色、内面暗褐色を呈し、外面には塗丹がわずかに残る。胎土に石英砂の混入多し。復原胴部径はやや大きいか。00025は胴部が算盤玉状にはる袋状口縁壺と考えられる。頸部よりやや下った部分と胴最大径下に一条づつの三角突帯をめぐらす。器色は外面黒褐色、内面灰褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成は良好である。胴部最大径復原値39.4cmをはかる。00007は広口壺口縁である。内外面ともに円塗りで、外面タテのヘラミガキがみられる。00018は短い鋤先口縁を有する広口壺である。器色は外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。外面に暗文、内面に横位のヘラミガキ・指おさえが残る。復原口径22.2cm。00001も短い鋤先口縁を有する広口壺である。器色は外面淡黄褐色、内面赤褐色を呈する。復原口径28cmをはかる。00037は胴上半部の形狀から長頸壺或は袋状口縁壺となるか。胴部最大径部に三角突帯をめぐらし、これ以上に暗文風のヘラミガキを施す。器色は外面褐～暗褐色、内面黒色を呈する。復原胴部径22cmをはかる。

無頸壺 00020は口縁端部が鋤先状を呈する。器色は外面暗赤褐色を呈する。胎土に石英砂混入多し。復原口径17cmをはかる。

鉢 00010は脚台付壺と呼んでも良いかも知れない。非常に繊細なつくりで、口縁・脚部も丁寧に整形される。器色は外面暗褐色、内面褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多し。口径13.8cm、器高16cm、脚径7.8cmをはかる。完器。00038は小型のもので、口縁を失う。外面は黒斑

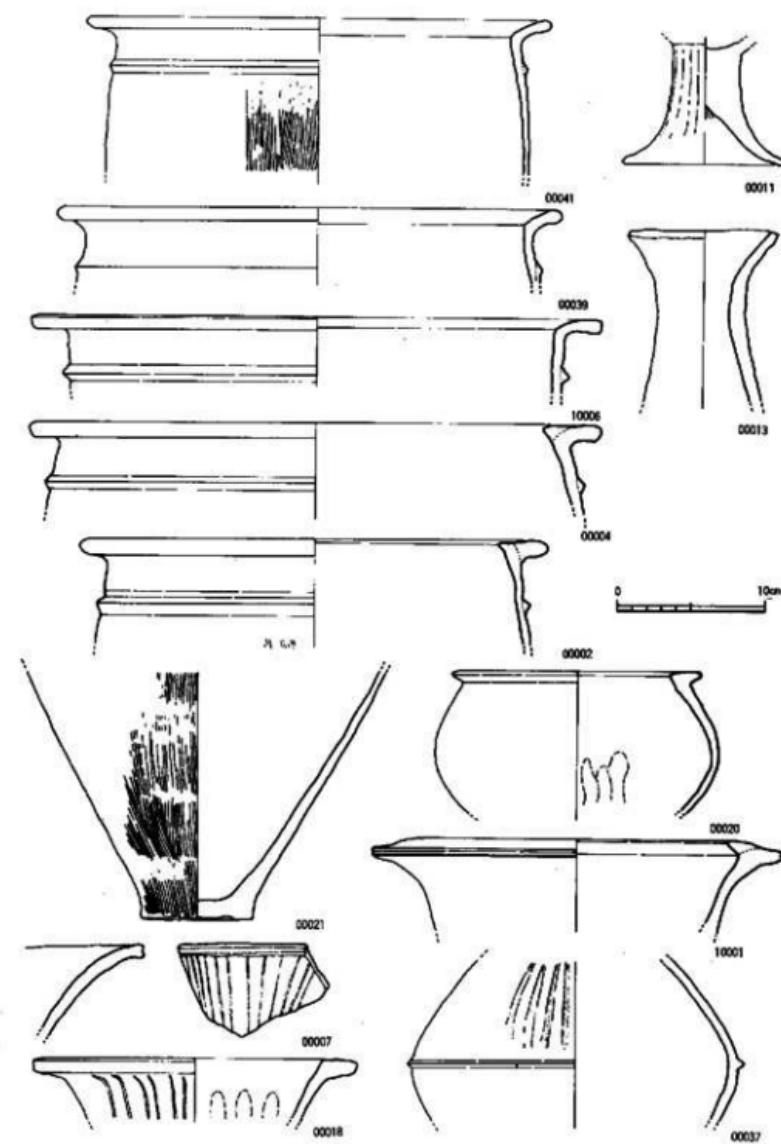


Fig. 29 SX01土續出土遺物實測圖 (2) (1/4)

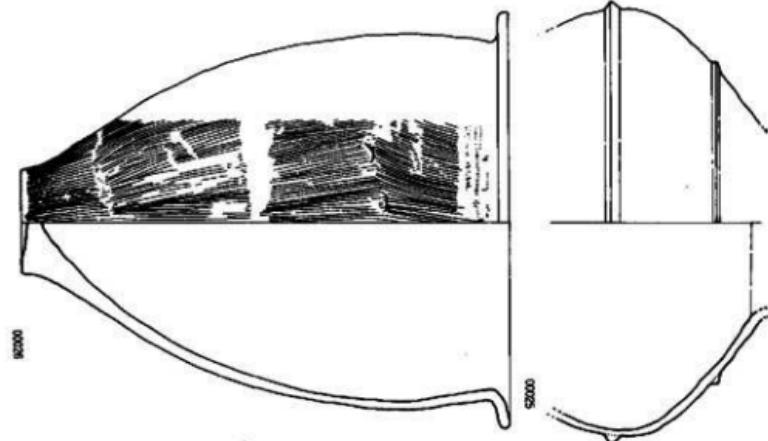
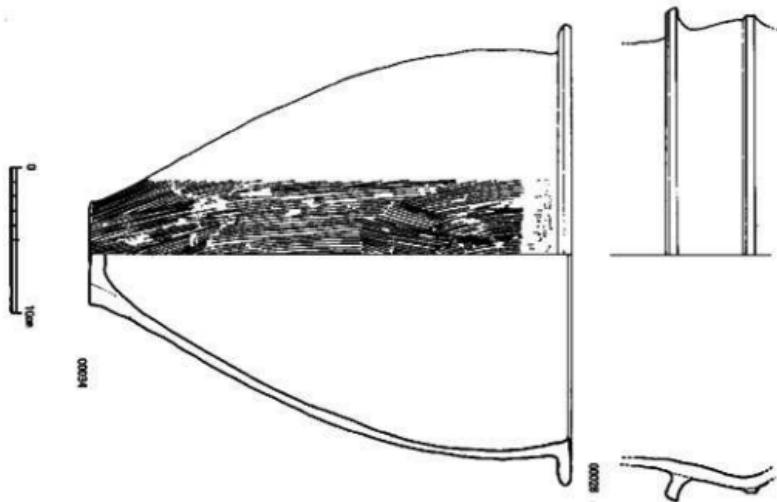


Fig. 30 SX 01 土壙出土遺物実測図 (3) (1/4)

を有し、器色明赤褐色を呈する。底部径4cmをはかる。00009は底部を失う。器色は内外面ともに淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に石英砂混入多し。復原口径11cmをはかる。00036は器色が内外面ともに褐色を呈する。整形が難で器面の凸凹がいちじるしい。胎土に石英砂を多く混入する。復原口径13cmをはかる。

器台 00013は筒筒部から上部が外方にひらく薄手の器台である。器色は内外面ともに淡灰黄褐色を呈する。器面は凸凹が多く、調整は難である。胎土に石英砂の混入多し。受部径10.2cmをはかる。

脚台 00011は筒筒部が中実で脚幅部がゆるやかに外方にひらく。器色は外面赤褐色、内面灰褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多し。外面筒部はヘラナデ、他はナデである。復原脚部径11.2cmをはかる。高環脚か。

S X 02 土壙 (Fig. 25-31-37-38. PL. 6)

調査区南縁付近を形づくる溝状の不整形な土壤である。ほぼ南北長8m、東西長4m、深さ30~40cm程の規模である。淡黄褐色シルトに掘込まれており、埋土は淡茶褐色土で单一である。また床面中には径が1.5×1m程で浅い皿状を呈する土壤がみられる。これは東側に隣接する部分にも同様の土壤群がうろこ状に群をなし、これが一つの大土壤となっているのに類似している。埋土内からは土師器甕や内黒高台付塊などが出土した。

出土遺物 (Fig. 31-37-38. PL. 9-10)

00122は、土製投弾である。体部に黒斑多く、暗赤褐色を呈する。長径3.9cm、幅2.6cm。重さ25gをはかる。00045は弥生前期壺口縁である。上端付近は肥厚するが段は不明瞭である。器色暗褐色を呈し、胎土に石英砂を多量に混入する。内外面ともにヘラミガキを施す。00046も同様な壺形土器口縁である。壺部はやや丸く、肥厚部の段も明瞭である。器色は内外面ともに明赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。復原口径は26~28cm程度か。

00049は高台付内黒土師器の塊である。器色は外面淡黄褐色~淡灰色を呈し、内面は黒色である。内面は幅広いヘラミガキを施す。胎土は密で、焼成良好である。底径6.6cmをはかる。00044は高台付須恵器壺である。器色は内外面ともに淡灰色を呈し、高台は非常に低い。胎土・焼成とともに良好である。底部径8.2cmをはかる。

S X 03 土壙 (Fig. 32-Fig. 38.)

調査区北端部の中央で検出した浅い土壤である。調査区外で完掘はできなかった。埋土下部は暗褐色粘質土であった。埋土中より磁器、須恵器高台付塊、瓦、土師皿などが少量出土した。

出土遺物 00058は須恵器高台付塊である。器色は外面淡灰~灰白色、内面淡灰色を呈する。高台は低いが安定している。器は差々瓦質で焼成が悪い。胎土密である。底部径13.6cmをはかる。00057は土師器皿である。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈する。底部ヘラ切り離しである。外面は回転ナデ。胎土に細砂を若干混入し、焼成堅級である。口径14.2cm。器高3cmをは

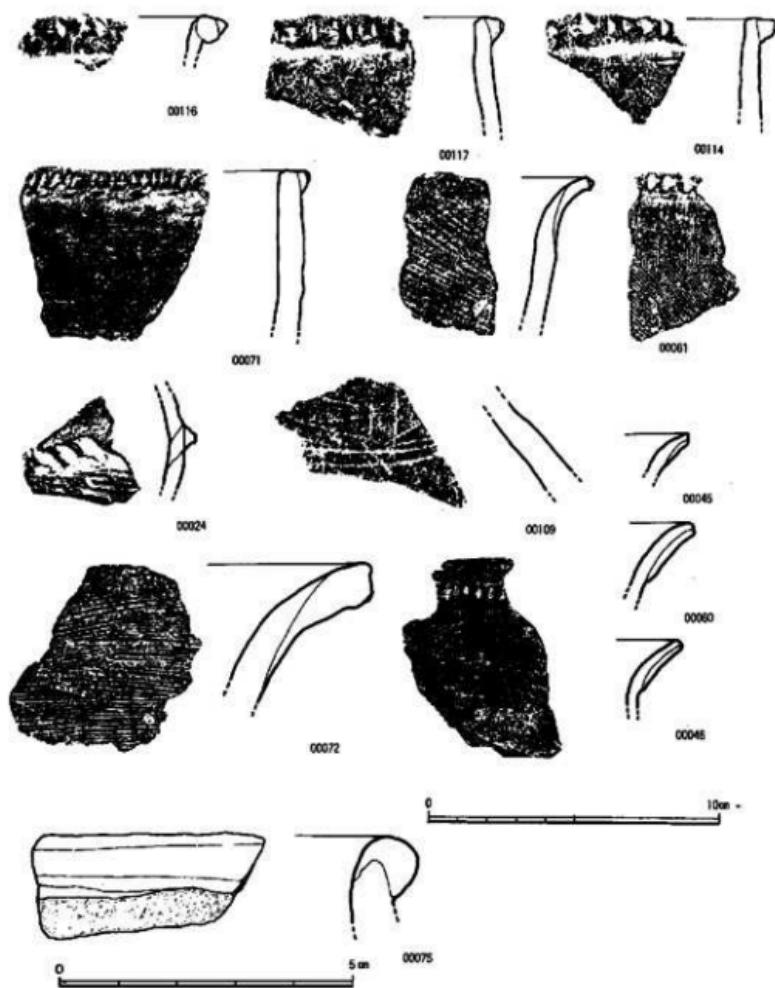


Fig. 31 調査区出土遺物実測図 (1/2)

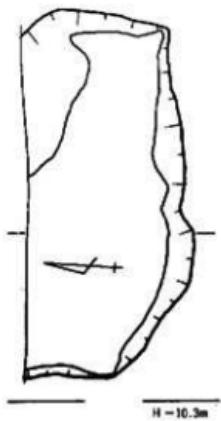


Fig. 32 S X 03 土壙出土状況測図 (1/30)

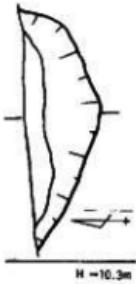


Fig. 33 S X 04 土壙出土状況測図 (1/30)

かる。00053は低く、端部の鈍い高台を有する壺である。外面淡灰色、内面灰黑色で光沢をもつ。須恵質である。胎土は精良で、焼成堅緻である。底部径6.7cmをはかる。

S X 04 土壙 (Fig. 33)

S X 03 土壙西側に位置しており、完全に調査には至らなかった。径1.3m、幅40cm程しか検出できていない。遺構埋土は灰白色微砂質土である。

出土遺物 磁器破片が出土したにすぎない。

S X 05 土壙 (Fig. 34)

調査区中央部に検出した円形の豊穴状土壙である。東西径0.9m、南北径1m程であり、深さは30~35cm程の規模である。埋土は黒~暗灰色砂質土である。時期を決定するような特徴的遺物は出土しなかった。

S X 06 土壙 (Fig. 25・31・37, PL. 8)

S X 05 土壙より南~4m程いった調査区南壁近くで検出した。本土壙も完掘をすることが不可能であり、十分にその形状をたしかめることができない。規模はほぼ東西で1.7m、南北で1m以上、深さ30cm程度である。遺構の埋土は漆黒色粘質土である。壁面上部は過去の削平を受けたと考えられ、埋土上面より、弥生中期土器。瓦片が出土している。併し乍ら本来の埋土からは板付皿式の土器類が出土しており、弥生前期に遡る所産のものであろう。

出土遺物 00062は外方につよく聞く如意状口縁を有する甕で、口縁下に2条の平行沈線を施す。器色は内外面ともに淡赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多い。復原口径28cmをはかる。00060は口縁端部が肥厚する壺口縁である。肥厚部の段は不明瞭であり、段以下と内面にヘラミガキを加える。器色は外面褐色、内面淡褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。00064は一部に珠文を残す瓦当である。

S X 07 土壙 (Fig. 35)

調査区北西隅近くに検出した。試掘トレンチおよび擾乱坑によって平面形は変化を受けているが、ほぼ南東から北西に軸を有する長方形の土壙と考えられる。規模は長・短が3.8×1.7m、深さ20cmをはかる。埋土は暗灰色砂質土であり、遺物は殆ど出土し

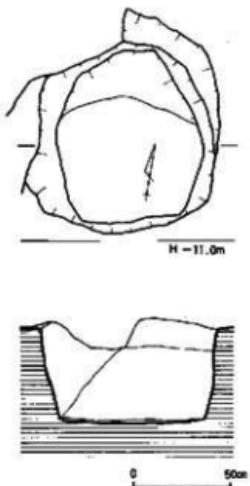


Fig. 34 SX05土壙出土状況
実測図 (1/30)

なかつた。併しながら埋土は他の中世期遺物を出土した土壙群と類似しており、形状から墳墓の可能性もあろう。

SX08土壙 (Fig. 25・31・37・38, PL. 8・9・10)

本土壙は、SX02の西側に隣接して南東から北西に伸びて北側で立あがる不整なものである。南東一北西長12m以上、東西幅5~1.3m、深さ70cm程をはかる。北側では縁辺が段状をなし、埋土はSX02土壙と同様に淡茶褐色土である。埋土中からは弥生式土器、陶質土器、朝鮮系無文土器、陶磁器類が出土した。

出土遺物 00069は鋤先状口縁を有する弥生時代中期高环々部である。環部は鉢状である。器色は内外面ともに淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に石英砂の混入多い。復原口径27.2cmをはかる。00068は短い口縁を有し、胴部が非常にはるやかである。直線的に外方にひろく口縁は端部がほぼ近い。器色は内外面ともに黄褐色を呈し、胎土に石英砂の混入多い。復原口径20.2cm。内外面ともに器面の荒れが著しく、調整不明である。00076は支脚か。器色は淡色は淡茶褐色を呈し、外面には指おさえが明瞭に残る。器面の凹凸がいちじるしい。胎土に石英砂を多く混入する。底部径8.8cm、器高12.3cmをはかる。00078は器台である。上端部を欠失する。器色は内外面ともに明茶褐色を呈し、焼成良好である。胎土に石英砂の混入多し。底部径8.7cm、現高12.7cmをはかる。

00071は口唇外面に刻目を施した壺口縁である。器色は淡褐色を呈し、胎土に石英砂を多く混入する。刻は細くて浅いものである。前期末の所産か。00072は大型壺口縁である。口縁下端部に細かい刻目を施す。外面はナデで、内面に細かい刷毛目を残す。器色は淡褐色を呈する。板付II式期のものであろう。00075は、口縁上端部に円錐状の粘土紐を貼った變形土器であり、形態から朝鮮系無文土器と考えられる。器色淡灰白色を呈し、胎土に石英砂の混入多し。

0006は内外面ともに暗灰色を呈し、外面を沈線で区切り、上下にスタンプ文を施している。新羅系土器である。内面はナデている。

00080は口縁端近くがやや肥厚するヘラ切り離しの土師器環である。器色は外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。外面はヨコナデで、内底部には不定方向のナデがみられる。胎土・焼成ともに良好である。口径13cm、器高3.75cm、底部径7.9cmをはかる。

SX09土壙 (Fig. 25, PL. 10)

SX08土壙西側に隣接して検出された溝状の土壙である。南東から北西方向に伸び、長・幅が7×1.6m、深さ30cm程を残す。底面高は南に従って低くなる。時期を特徴づける該期の遺

物は出土しなかった。

S X10土壤 (Fig. 36-38, PL. 8)

S K07土壤の東側 3m の地点で検出した。本土壠は東側を擾乱によって影響を受けているが、

ほぼ南北方向に軸
を有し、長幅が3.1
× 1.5 m 程で、深
さ40cmを残す。埋
土は暗褐色砂質土
であるが、床面か
らは遺構の性格を
決定する遺物はな
かった。

出土遺物 00085

は高台付上師器壠
である。器色は内
外面ともに淡赤褐色
を呈し、器面の
磨滅がいちじるし
い。底部径 7.8 cm
をはかる。

2) 溝状遺構 (Fig.
25-31-38)

溝としたものの
中には本来土壤で
あった可能性のあ
るものも含む。

SDola溝 (Fig.
25-31-38)

本遺構はほぼ南
北にのびる浅いも
ので、南北 3m 以
上、東西幅 2m 、
深さ20cm程の規模

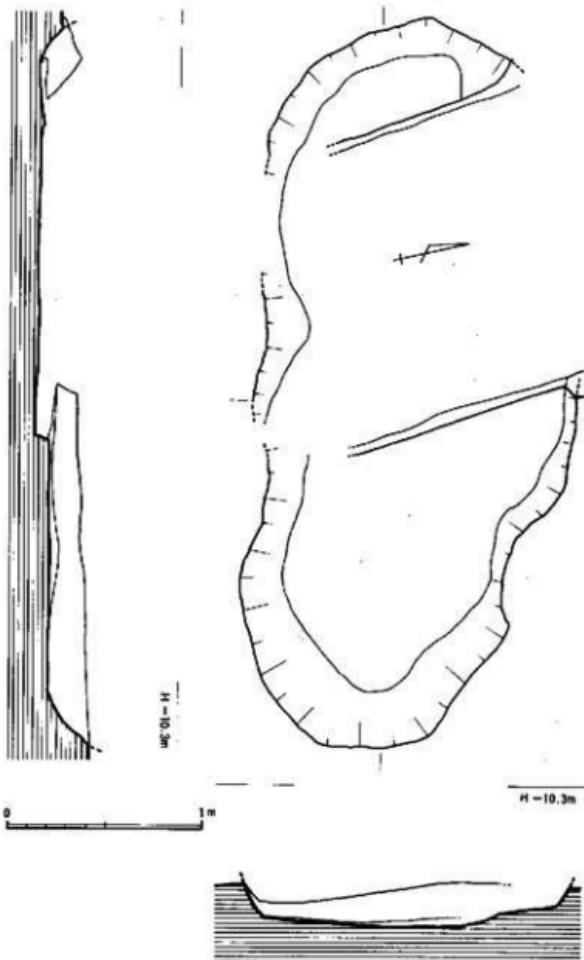


Fig. 37 土壠・包含層出土遺物実測図 (1) (1/2-1/3)

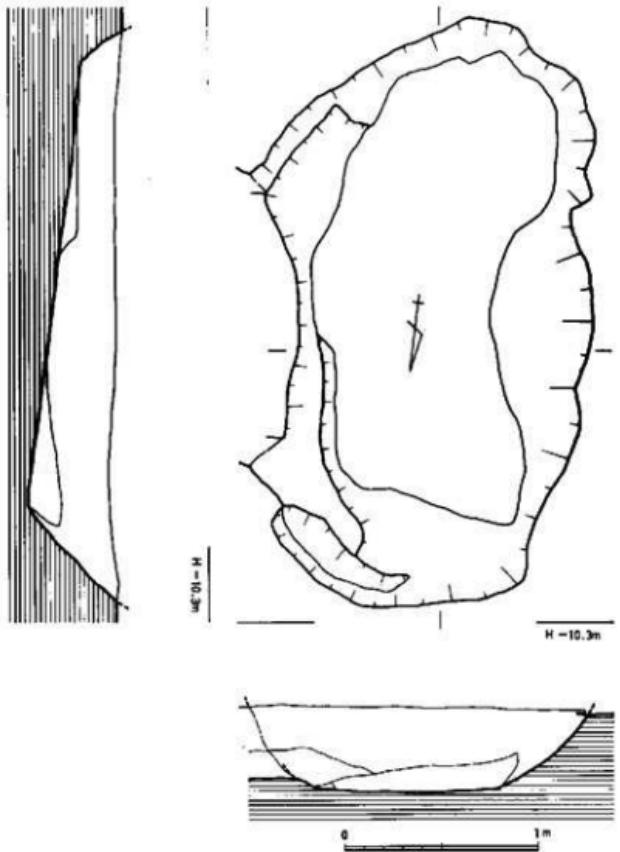


Fig. 36 SX10土壤出土状況実測図 (1/30)

である。北側を試掘トレンチに、また南側をSX05土壤などによって失なっているが、本来浅いものであった可能性が高い。埋土は暗褐色砂質土であり、埋土中より新羅土器、内黒土師器塊、大鉢などが出土した。

出土遺物

00118は土製紡錘車である。形は円形で、厚さは6.5mmをはかる。軽量である。弥生時代の所産であろう。

00087は淡いオリーブ色の釉をかける青磁器碗である。外底

部は露胎となる。底部の特徴から龍泉窯青磁であろう。高台部径8.2cm。00089は長胴となる陶器壺底部である。外底端よりやや上った位置に一条の沈線を施す。外底部を除き淡いオリーブ色釉をかける。底部径6.6cmをはかる。

00104は内黒の高台付土師器塊である。外面は赤褐色を呈する。内面は黒色でヘラミガキが顕著である。胎土・焼成とも良好である。底部径5.8cmをはかる。00113も同様の内黒土師器であり、高台はやや外方に踏張る。外面は淡赤褐色を呈し、内面は黒色で同心円状のヘラミガキを加える。底部径6.9cmをはかる。00094も同様の内黒土師器である。器色は外面淡赤褐色

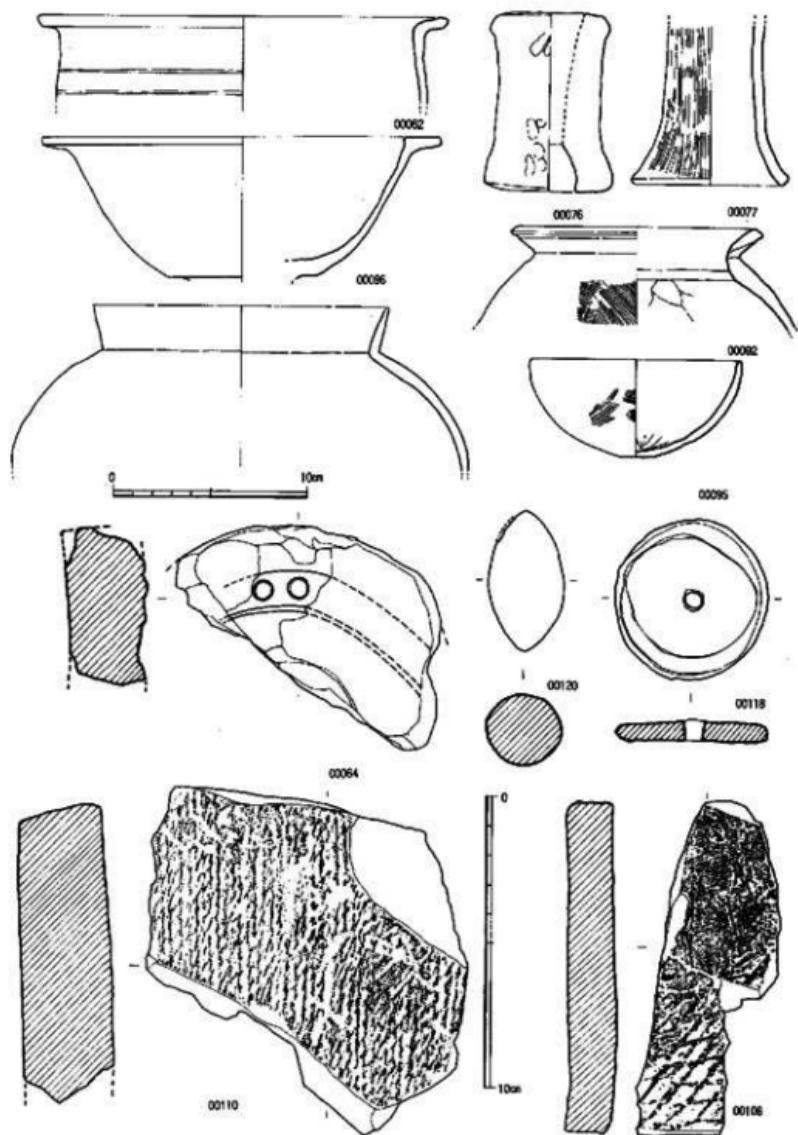


Fig. 37 土壤・包含層出土遺物実測図 (1) (1/2・1/3)

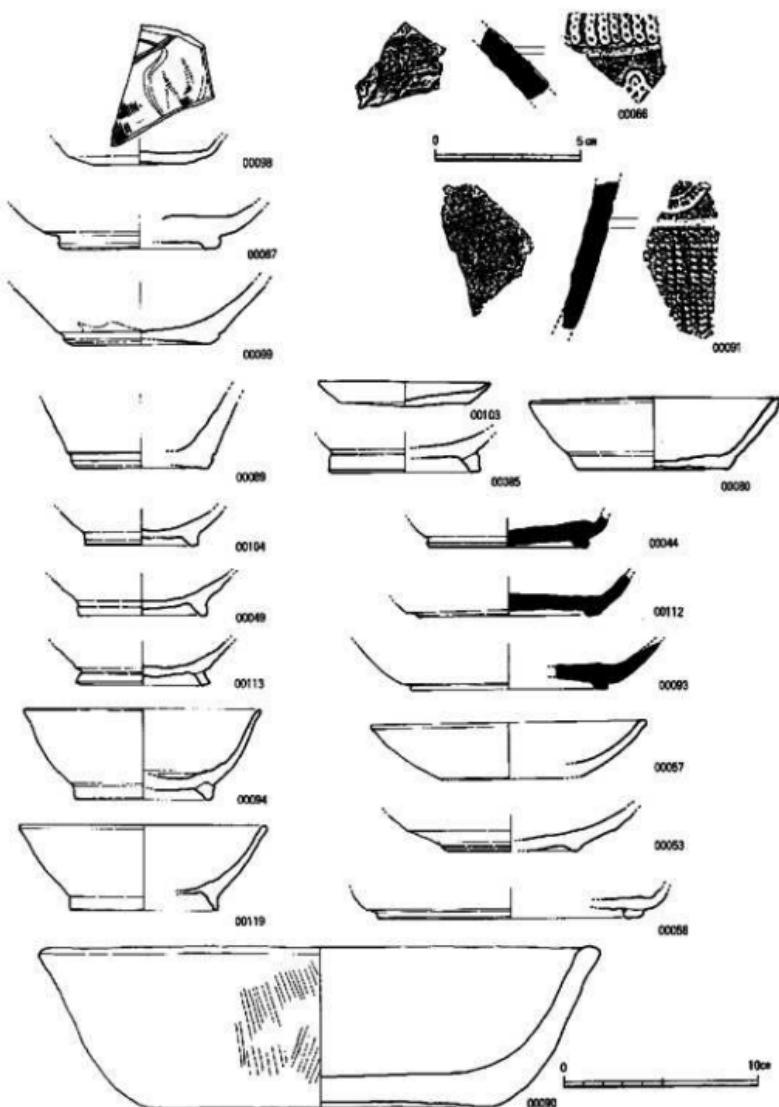


Fig. 38 土壤・包含層出土遺物実測図 (2) (1/2-1/3)

で、内面は黒色を呈し、同心円状のヘラミガキを加えている。口径12cm、器高4.7cm、高台径7cmをはかる。

00093は須恵器高台壺である。高台は低くやや外方に踏張る。器色は淡灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。底部径10.2cmをはかる。

00090は土師器の鉢である。全体に器壁が厚く、最大部で1.7cmをはかる。外面に荒いタテ刷毛目を施す。胎土に石英砂・金雲母を多く含み、焼成は良好である。口径28cm、器高8.3cm、底径17cmをはかる。

00091は新羅系土器である。淡灰色を呈し、沈線文をはさんで上・下にスタンプ文を施す。蓋の類か。

00092は土師器甕である。く字形に屈折する口縁部を有し、全体に分厚い。器色は外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈する。外面は刷毛目、内面は顯著にヘラ削りが残る。口径17.4cmをはかる。

SD01b溝(Fig. 25-31-38)

SD01aの東に隣接している。長幅が2×1.3m、深さ10cm程を残すが、端部は南・北へ夫々のびると考えられた。埋土は暗褐色砂質土であり、内部より磁器、土師器などが出土した。

出土遺物(Fig. 31-38, PL. 9)

00095は土師器鉢である。底部に極小の底部をもつ。器色暗褐色を呈し、外面に細かいヨコ刷毛目、内面はナデである。口径14.5cm、器高6.7cmをはかる。

00099は越州窯青磁碗である。底部端よりやや上った位置が沈線状となり、これより上部に灰色ををおびたオリーブ色釉がかかる。外底部端に陶土使用の目あとが残る。底部径7cmをはかる。00098は見込みに電光文を施した珠光青磁皿である。底径4.6cmをはかる。

SD02溝(Fig. 25)

調査区東端に見付かった南北溝である。延長4m以上、幅70~30cm、深さ10cm程のものであるが性格は不明である。

SD03溝(Fig. 25)

調査区中央に検出された小溝である。ほぼ東西に走り、延長6m以上、幅30cm、深さ10cmにみたない。遺物は出土しなかったが、S X01土壤の埋土とよく似る埋土である。

3) 包含層・表探の遺物(Fig. 31-37-38)

瓦(00110・00106)、突帯文土器甕(00116・00117・00114)、弥生前期後半壺(00109)、内黒土師器壺(00119)および糸切り小皿(00103)などが出土した。

第4章 おわりに

これまで弥永東・大橋南公園建設とともに弥永原遺跡群第4次調査および大橋E遺跡第1・2次調査について調査の成果を述べて來たが、以下では今回の調査で得られた内容をあげて若干のまとめとしたい。

弥永原遺跡群第4次調査は、去る昭和41~42(1966~1967)年に調査された第3次調査のB地区の北側に位置し、検出遺構が竪穴住居址2軒、土壙1基、溝1条それにピット群などであり、保存状態も良好なものは少なかった。また遺構に伴う該期の遺物も量的には僅少であったが、一応弥生時代後期では溝1条、ピット群があり、他に大型方形土壙もこの時期に含まれる可能性がある。更に竪穴住居址2軒は古墳時代後期(6世紀後半)と考えられ、第3次調査B地区で検出された弥生時代中~後期の竪穴住居址、溝などとともに同時期の集落をなすものと考えられる。

弥永原遺跡群は、第2・3次調査での多くの成果が十分に報告されることがなく、全体像を把握するには対峙する日佐原遺跡を含めた報告書の刊行がまたれるところである。

次に大橋E遺跡第1・2次調査について触れる。

大橋E遺跡は既述のようにこれまで早い時期の市街化によって從来遺跡の有無が不詳な地域であった。

遺跡は那珂川の冲積作用による堆積土(粗砂)上に立地し、標高10m前後をはかる。

第1次調査では2つの調査区、2本のトレンチから、土壙9基(SK-01~09)、ピット群、包含層が検出された。

土壙群は長方形~不整な隅丸方形を呈し、弥生前期(板付II式)~古墳時代前期に亘る遺物を含んでいる。SK-01土壙は埋土中より多量の弥生時代中期土器とともに下層から古墳時代前期の小型丸底壺が出土している。SK-02土壙も少量の古墳時代土師器が出土した。SK-03土壙は弥生時代中期、SK-04土壙では布留式土器が出土、SK-05土壙はSK-01土壙よりも古い。またSK-06・07土壙も古墳時代前期土師器を含む。SK-08土壙は弥生時代中期土器を出土している。従って上層では弥生時代中期、古墳時代前期の二時期に区別される。

また包含層は弥生時代中期土器・扁平片刃石斧の他に古墳時代前期土器、細型銅劍と考えられる鉢型破片が出土した。

次に第2次調査では土壙9(SX01~09)基、溝4条が検出された。土壙のうち2基(SX01・06)が夫々弥生時代中期・同前期である。また溝では3条(SD01a・01b、SD02)が中世期(13~14世紀)の所産である。この他に9~10世紀代の土師器壺、輸入青磁器(越州青磁)碗、新羅系土器、瓦当などが遺構から遊離して出土した。

以上の遺構・遺物から大橋E遺跡の遺構推移を想定することとする。

第Ⅰ期—弥生時代前期末（板付Ⅱ式期）一夜臼式壺とともに該期の壺・甌およびこれに伴うと考えられる朝鮮系無文土器甌などがある。第Ⅱ期—弥生時代中期前葉、第Ⅲ期—弥生時代中期後葉、第Ⅳ期—弥生時代後期、第Ⅴ期—古墳時代前期（布留期併行）、第Ⅵ期—平安時代（9～10世紀）、第Ⅶ期—中世期（13～14世紀）に区別できると考えられる。これらは何れも生活遺構と考えられるものであるが、第Ⅶ期の平安時代では少量ではあるが一般の生活遺物と異なった輸入青磁器、瓦類を含み、遺跡近傍に宮衙施設のある可能性がある。また細型銅劍鋒型、朝鮮系無文土器の発見は特記できよう。

図 版
PLATES



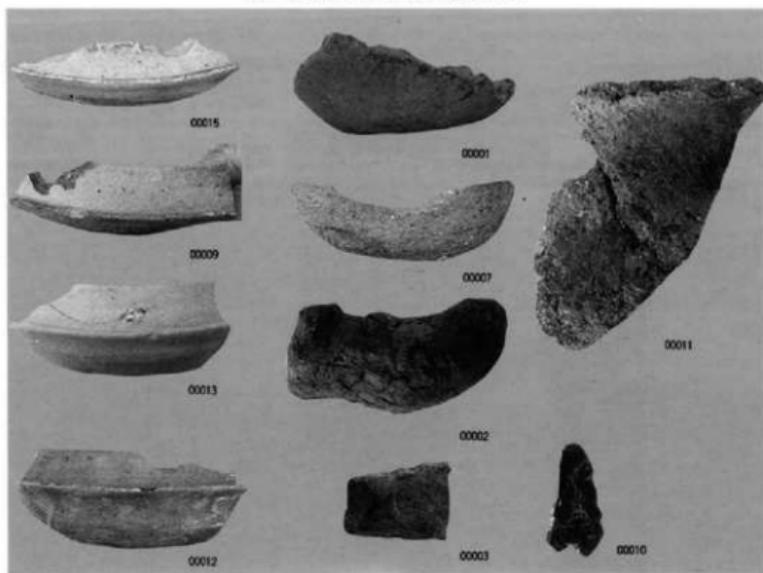
(1) 柳瀬東公園調査前（南から）



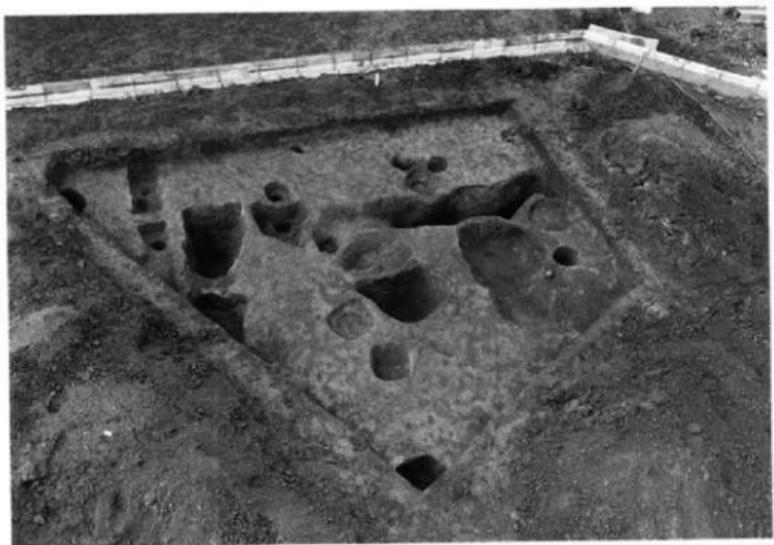
(2) 遺構出土状況全景（北東から）



(1) SC 02住居址出土状況（北から）



(2) 造構出土遺物



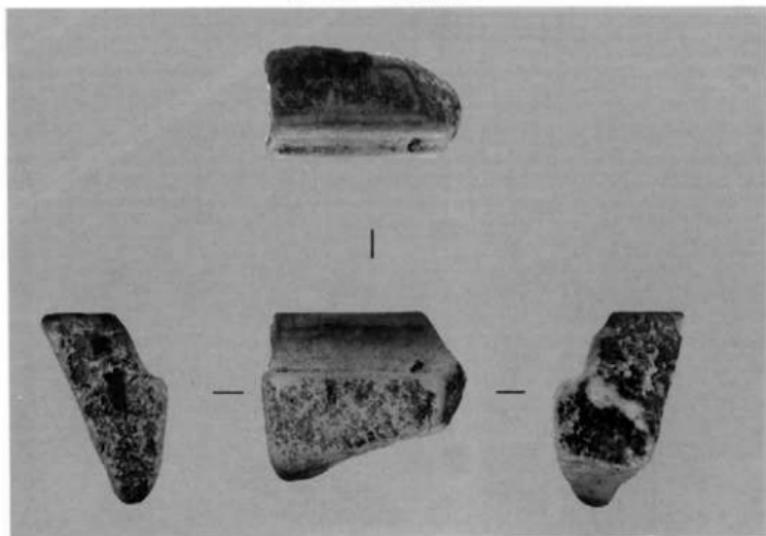
(1) 大橋E遺跡第1次調査第I区全景



(2) 大橋E遺跡第1次調査第II区全景



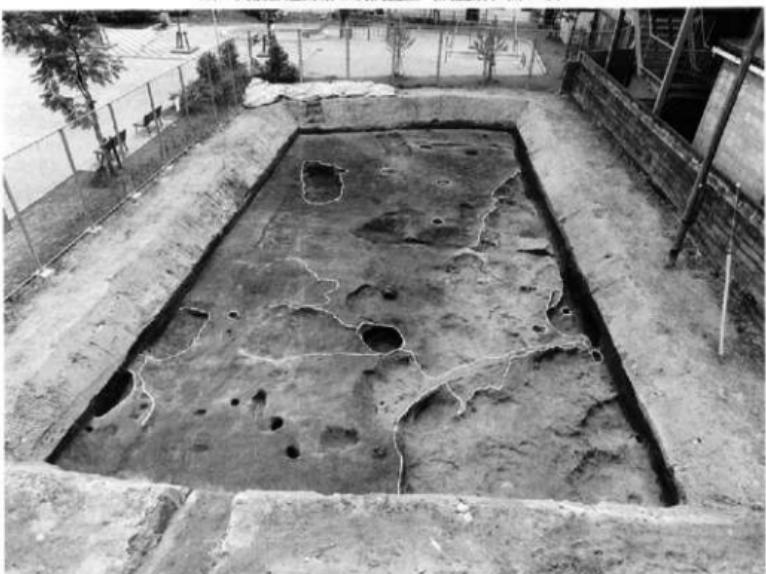
(1) SK-01土壤検出状況



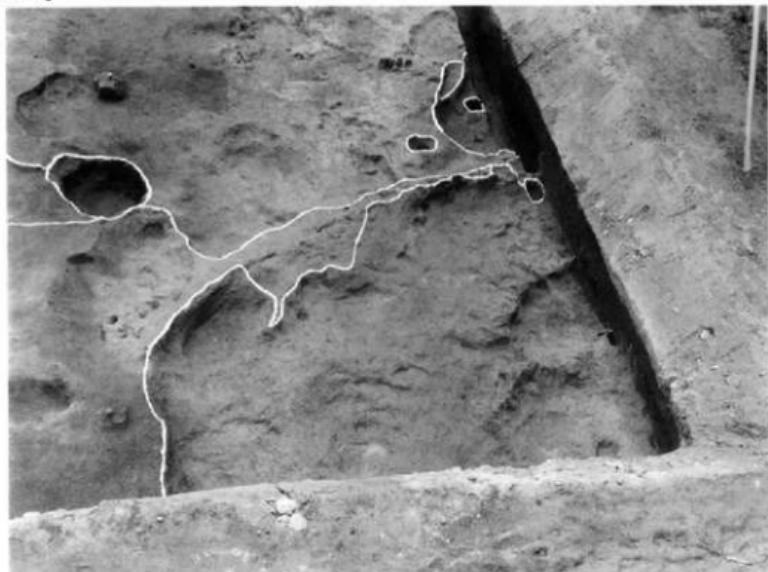
(2) 包含層出土鉄製



(1) 大橋E 遺跡第2次調査区（調査前、西から）



(2) 大橋E 遺跡第2次調査東半部全景（西から）



(1) SX02土壤出土状況（西から）



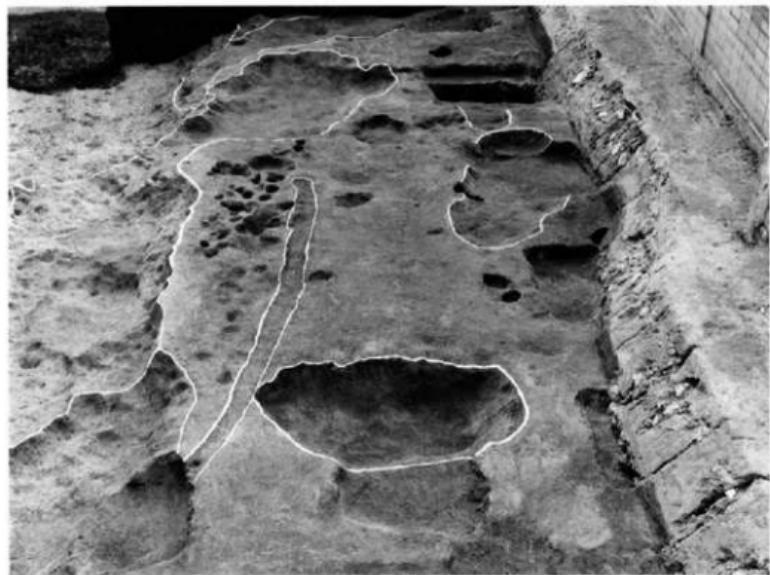
(2) SX01土壤出土状況（南から）



(1) SX 土壌内遺物出土状況（西から）



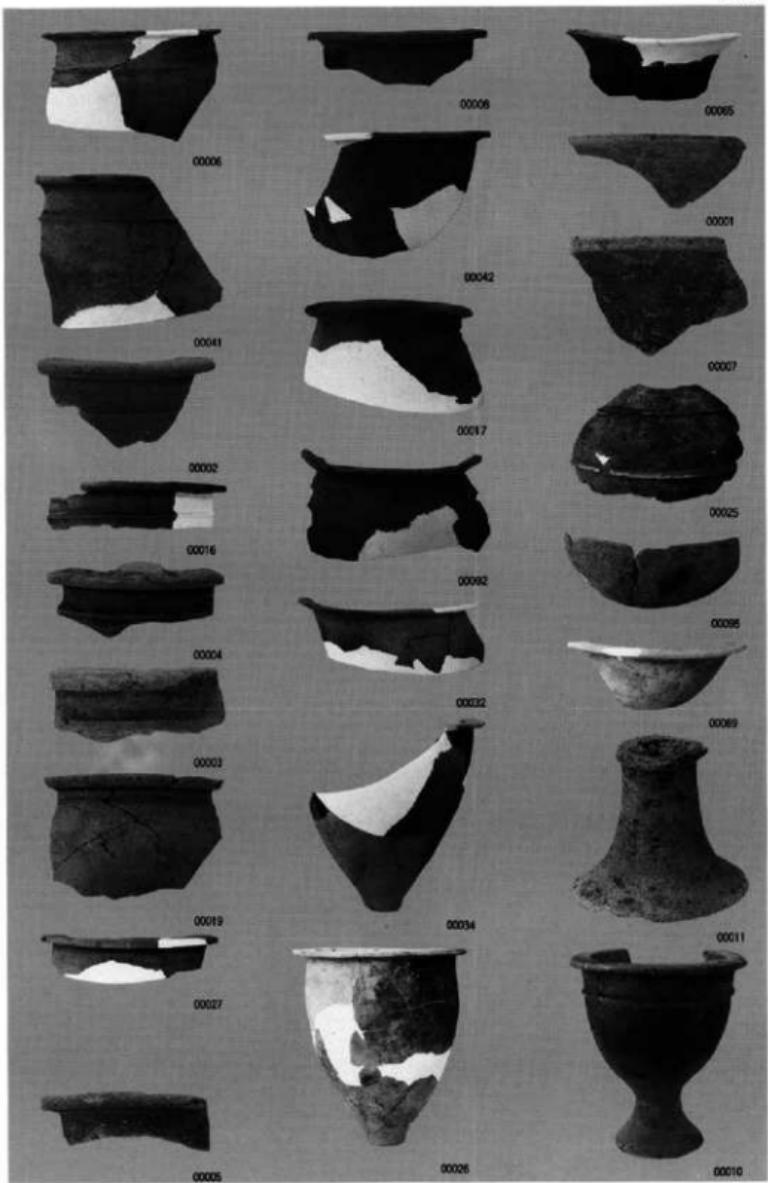
(2) 大橋E 通路第2次調査西半部全景（東から）



(1) SX06・08・10土壤出土状況（東から）



(2) 調査区西半部作業風景（東から）



造構出土遺物 (1)



遺構出土遺物 (2)

公園関係埋蔵文化財調査報告書

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第220集

1990年3月31日

発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷：久野印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目5番8号
